

# 寛元四年『春日若宮社歌合』注釈―「雪」―

井上麻由子	大山	晋吾
志水真祐子	土居	京
濱田 雄介	松本	茜
三好 優希	吉井	佐織
藤川 功和		

## はじめに

## 凡例

一、底本は、宮内庁書陵部本（孤本）を用いた。

一、注釈は、【本文】を示した後、【他所伝】【本歌】【参考歌】【語釈】【補足】【通釈】をあげた。

一、底本の作者一覧の注釈は割愛し、作者については、【語釈】に記した。

一、見せけちによって訂正のある箇所は、訂正後の本文を採用した。

一、翻字本文には適宜読点を施し、字体は現行の活字体に改めた。

一、語釈を施した箇所には、本文右傍に①、②…の通し番号を付した。

一、底本で文意不通等が認められる場合、【本文】で該当箇所右傍に（ママ）を付し、【語釈】で触れた。

一、引用本文は、原則として『新編国歌大観』に拠り、その他の引用文献は、適宜底本を示した。なお、引用本文には、適宜、傍線、振り仮名等を付した。

一、『万葉集』については、本文、歌番号ともに塙書房刊『万葉集 訳文篇』を用いた。

寛元四年『春日若宮社歌合』は、寛元四年（一二四六）十二月催行の歌合で、「雪」・

「恋」・「祝」の三題、三十九番からなる。出詠者は、藤原知家（蓮性）・真観（藤原光俊）ら二十六名で、判詞は知家が執筆している。

尾道市立大学日本文学科中世文学専門演習 a、b の受講者は、平成二十三年十月から平成二十四年八月にかけて、「雪」題の輪読を進めてきた。本稿は、輪読の成果を基に、さらに数回の検討会を経て稿を成したものである。輪読時の各番担当者は以下の通り。

一番―濱田	二番―井上	三番―松本	四番―土居
五番―藤川	六番―土居	七番―松本	八番―松本
九番―吉井	十番―志水	十一番―土居	十二番―大山
十三番―三好			

## 〈一番〉

【本文】

一番 雪<sup>①</sup>

左勝 参議藤原資季<sup>②</sup>

君か代のさかへてほとをふりつもる今年の雪のふかさにそしる

右

わきて猶雪ふるみちのかなしきは世にすみかたき山辺なりけり<sup>③</sup>

左歌、風体うるはしくてよろしう侍に、本末の句の終字

おなし、天徳の歌合にもその難侍へし、然而ふかきとかには

侍ぬにや、右歌、いとをかしく侍に、述懐の心なり、た、し、

左、雪尺にみちて豊年をあらはず心、尤足賞祝、仍為勝

【他書所伝】

〈左歌〉ナシ 〈右歌〉ナシ

【語釈】

①雪―『万葉集』には「詠雪」等の詞書がみえ、『古今和歌六帖』では、「のこりのゆき」、「ゆき」、「みゆき」等の題がみえる。勅撰集では、明らかに題詠であるが明示される詠は三代集にはなく、『後拾遺和歌集』以降多くみえる。歌合では寛和二年（九八六）『内裏歌合』の「雪」題が早い例。保延元年（一一三五）頃『為忠家後度百首』では「神社雪」、「故郷雪」等、雪の結題で十五首が詠まれている。また、神社歌合における先行例としては承安二年（一一七二）『広田社歌合』の「社頭雪」題がある。当該歌合が催されたのは十二月であり、当季に即した題といえる。

②参議藤原資季―資家男。母は光長女。二条と号す。承元元年（一一〇七）生、正応二年（一一八九）没、八三歳。建保四年（一一二六）叙爵後、建長二年（一一五〇）正二位、正元元年（一一五九）権大納言に至る。後堀河天皇中宮嬪子（藻壁門院）の職事を務め（『民経記』貞永元年二月四日条）、後に後嵯峨院院司（正元元年一〇月六日条）、評定衆の一員にもなっている（文永四年三月二日）。文永五年（一一二八）一〇月五日、後嵯峨院の落飾に伴い出家（『民経記』）。法名了心。父

資家の代より九条家との繋がりがみられ、一方、真観（光俊）とも縁戚関係にあった。貞永元年（一一三三）『光明峰寺撰政治家歌合』、『名所月歌合』、建長三年九月『影

供歌合』、弘長二年（一一六二）『三十六人大歌合』、文永二年八月十五夜『歌合』、

文永二年九月『龜山殿五首歌合』等の歌合や『宝治百首』、正嘉三年（一一五九）

『北山行幸和歌』、弘長三年二月一日『龜山殿御会』、文永二年七月七日『白河殿

七百首』、『弘安百首』（散佚、『夫木和歌抄』一三七〇詞書）等に出詠。『万代和歌集』、

『秋風抄』、『現存和歌六帖』、『秋風和歌集』等に歌が採られている。また、文永三

年三月二日に行われた続古今竟宴の場において和歌を詠んだ事が、彼自身の記

録から知られる（『続古今竟宴資季卿記』）。日記に『荒涼記』がある。『新勅撰和

歌集』以下の勅撰集に三七首入集。

③君か代のさかへ―天皇や院の治世の繁昌を祈念する。「あめつちのさかへますべ

き君が代をつたへし国もうれしからずや」（『正治初度百首』祝五首・一八〇〇・

生蓮（師光）。当該歌合催行年の正月に後嵯峨院政が開始されている。

④ふりつもる今年の雪のふかさにそしる―雪の降り積もる様に、天皇の治世の繁

昌を重ねる。「つもるべしゆきつもるべし君がよはまつのほなさくちたびみるまで」

（二度本『金葉和歌集』賀部・三三三〇・「かへし」・顕房）。

⑤藻壁門院少将―中宮少将とも。生没年未詳（『続古今和歌集目録』故者に名がみ

えないため文永三年三月頃までは生存か）。父は当該歌合六番出詠の藤原信実。同

じく七番出詠の為継は兄弟である。妹に弁内侍、後深草院少将内侍がいる。藻壁

門院嬪子に出仕。嬪子は天福元年（一一三三）九月一八日に二五歳で崩御している。

寛喜四年（一一三三）『日吉社撰歌合』、『石清水若宮歌合』、貞永元年（一一三三）

『洞院撰政治家百首』、『光明峰寺撰政治家歌合』、『名所月歌合』、寛元元年（一一四三）

『河合社歌合』、建長三年（一一五二）『閑窓撰歌合』、弘長二年（一一六二）『三十六

人大歌合』等に出詠。『万代和歌集』、『秋風抄』、『現存和歌六帖』、『秋風和歌集』、

『雲葉和歌集』、『人家和歌集』、『現存三十六人詩歌』、『新時代不同歌合』、『女房

三十六人歌合』等に歌が採られている。勅撰集には『新勅撰和歌集』以下、六一

首入集。

⑥雪ふるみち―雪が「降る」意と「古道」を掛ける。「三吉野の雪にこもれる山人

もふる道とめてねをやなくらん」(『拾遺和歌集』恋三・八四七・「たえて年ごろに  
なりにける女の許にまかりて、雪のふり侍りければ」・景明)。

⑦世にすみかたき山辺なりけり―「あしがものさわぐ入江のみづのえのよにすみ  
がたき我が身なりけり」(『新古今和歌集』雑歌下・一七〇七・(題しらず)・人麿)  
等のように「よに」と「世に」を掛ける。

⑧風体―「このまより日かげやはるをもらすらむ松のいはねの水のしらなみ」・「春  
くればこほりをはらふたにかぜのおとにぞつづく山河のみづ」(『六百番歌合』春部・  
春水・十八番・三五・三六・良経、信定) に対する俊成の判詞「歌の風体共に宜し  
く侍るを」のように歌の姿、一首全体から生じる情趣等を指す。

⑨本末の句の終字おなし、天徳の歌合にもその難侍へし、然而ふかきとかには侍  
ぬにや―「本末」は歌の上の句と下の句。「天徳の歌合」は天徳四年『内裏歌合』(判者、  
実頼)を指す。同歌合八番では「ひとへつつやへ山ぶきはひらけなん」ほどへてに  
ほふはなとたのまむ」(右・款冬・一七・兼盛) に対し、「右歌、やへ山ぶきのひ  
とへつつひらけんは、ひとへなるやまぶきにてこそはあらめ、心はあるにたれ  
ども、やへさかすはほいなくやあらん、又、しものくのはて、かみのくのはてと、  
おなじもじあり、仍以左為勝」という判が付され、兼盛詠が負けている。ただし

同歌合七番左歌および十番左歌もまた、上の句と下の句の末字が同字病を侵して  
いるが、判詞での言及はみられない。また、同歌合八番は『袋草紙』にも引用が  
みえ、清輔は引用の後に、同字病を侵した古今集入集歌「ちらねどもかねてぞを  
しきもみぢばは今は限の色と見つれば」(『古今和歌集』秋歌下・二二六四・寛平御  
時きさいの宮の歌合のうた)・よみ人しらず)と天徳四年『内裏歌合』七番を挙げ  
ており、必ずしも重大な欠点としては考えていなかったことが想像される。『千五百  
番歌合』では、「よし野山みねのしらゆきいかならしふもとのさともふらぬ日はな  
し」(冬二・九百三番左・一八〇四・慈円) に対して季経が「左歌、宜しくきこえ  
侍るに、上下の句のはての字同じ、これは同声韻病と浜成式にいだせり、随て天  
徳四年内裏歌合に兼盛が款冬歌に、ひとへつつやへやまぶきはひらけなんほどへ  
てにはふ花とたのまん、とよめるを声韻病ととがめられたり(中略)左は有聲韻病、  
雖然、ちかごろはあながちにはばからざるにや」と判じており、「ふかきとか」と

されなことが往々にしてあったことがうかがえる。

⑩述懐の心―「述懐」は懐を述ぶる歌の意。祝言を詠む場合もあるとされるが、  
老いや不遇を嘆く等私情を詠む場合が多い。述懐は「山の端にいそぎなかりそ夕  
月夜うき身だにこそ世には住みけれ」(元永二年『内大臣家歌合』暮月・二番左・  
二五・顕仲) に対する顕季の判詞に「左歌、述懐の心なり、歌合にはよまずとぞ  
うけ給はる」とみえるように晴の場である歌合には似つかわしくないさまとして  
指摘されることが多く、知家もその点を難じているものと思われる。当該歌合で  
も知家は「春日山しられぬ谷の埋木ももえ出づる春にいまやあひみん」(祝・卅九  
番右・七八・下野) に対して「しられぬたにの埋木と侍る、述懐の歌などや申つ  
く侍らん、いかが」と指摘している。

⑪雪尺にみちて豊年をあらはす心―雪が一尺に降り積もつて豊年の瑞兆を表す(と  
いう)心。「盈尺則呈瑞於豊年」(尺に盈つれば則ち瑞を豊年に呈し) (『文選』雪賦、  
謝惠連) を踏まえた指摘。

【通釈】  
一番 雪

左 勝

参議藤原資季

わが君の治世が栄えて、その程を降り積もる今年の雪の深さによつて知るので  
ある。

右

漢壁門院少将

とりわけやはり雪の降る古道が悲しい(と感じる)のは、実にこの世に住み難  
い(この)山辺であったのだな。

〔判詞〕左の歌は、一首全体が整っていて美しくて難がなく、ございますが、上の句  
と下の句の末尾が同じで、天徳の歌合でもその難がございませう。そうは  
いっても深い欠点ではありませんでしょうか。右の歌は、たいそう趣がございま  
すが、述懐の心である。しかしながら、左(の歌)は、雪が一尺に降り積もつて  
豊年の瑞兆を表す(という)心は、いかにも祝意をたたえるのに十分である。よつ  
て(左歌を)勝ちとする。

## 〈二番〉

【本文】

二番

左<sup>①</sup> 入道従三位伊成

さらぬたに人目稀なる故郷のよしの、山もみ雪ふるらし

右 従三位藤原伊忠

人とはて里はふりにし宿なれはいつも跡見ぬ庭のゆきかな

左歌、下句古今の歌にてや侍る、右歌は、人とはてあと

見ぬ、病にや侍らん、不及申勝負歎

【他書所伝】

〈左歌〉ナシ 〈右歌〉ナシ

【参考歌】

〈左歌〉

『古今和歌集』冬歌・三二七・「題しらず」・よみ人しらず

ゆふされば衣手さむしみよしののよしのの山にみ雪ふるらし

【語釈】

①左―底本には勝負付がみえない。但し、判詞の内容からこの番は持となったであろうことが窺える。【語釈】⑩参照。

②入道従三位伊成―藤原。建久五年（一一九四）生、没年未詳。名は資定とも（尊卑分脈）。成定男。貞元二年（一一〇八）叙爵、寛喜三年（一一三二）従四位上（鷹司院御給）、仁治二年（一二四一）従三位となる。仁治四年、近衛家実の死去に伴い出家（公卿補任）。当該歌合の他、寛喜四年『日吉社撰歌合』、『石清水若宮歌合』に出詠。『万代和歌集』や『秋風抄』、『現存和歌六帖』の作者。『隆祐集』により、藤原隆祐との交流が認められる。勅撰集には『続後撰和歌集』以下二首入集。

③さらぬたに―ただでさえ、の意。「さらぬだに」くる人もなきわがやどにあとたえまさるけさのしらゆき」（永久四年『六条宰相家歌合』雪・十番左・一九・兼能）、  
「さらぬだに」よもぎが宿はさびしきに雪ふみわけてたれかとふべき」（永万二年『中

宮亮重家朝臣家歌合』雪・十一番右・一〇六・寂然）等がある。

④人目稀なる―「をちこちの人めまれなる山里に家るせんとは思ひきや君」（後撰和歌集）雑二・一一七二・「むかしおなじ所に宮づかへし侍りける女の、をどにつきて人のくにおちるたりけるをききつけて、心ありける人なれば、いひつかはしける」・（よみ人しらず）等のように、人の往来がめつたにないことをいう。また、「ゆきふりてまれの人もたえぬらむよしのの山のみねのかけみち」（『更級日記』二四）のように、雪が降ることですぐに人の往来がなくなるとする詠もみられる。

⑤故郷のよしの、山―「故郷」は昔に都等があったが今は荒れ果てた場所、旧都を指す。吉野には七世紀頃に吉野宮（吉野離宮）が営まれていた。「よしの、山」は吉野山及び、その周辺一帯の総称。多くは「桜」と「雪」が景物として詠まれ、「わがやどの雪につけてぞふるさとのよしのの山は思ひやらるる」（『拾遺和歌集』冬・二四七・「題しらず」・能宣）等のように雪深い地と認識されていた。

⑥従三位藤原伊忠―生没年未詳。忠行男。当該歌合三番出詠の忠兼は兄弟。姉妹に近衛家実の妾となった女子がおり、また伊忠の子（父忠行の女子となる）も家実の妾で兼平の生母となった（『尊卑分脈』）。嘉禎元年（一一三五）従四位上（鷹司院御給）、仁治四年（一二四三）従三位（臨時）、弘長元年（一一六一）出家か。宝治元年（一二四七）頃「住吉社三十六首」に出詠、『万代和歌集』、『秋風抄』、『秋風和歌集』、『現存和歌六帖』、『雲葉和歌集』の作者。

⑦里はふりにし宿なれは―ここでは「里」と「宿」のそれぞれに「ふりにし」が作用し、古びてしまった地であることを強調している。

⑧下句古今の歌にてや侍る―当該歌の下句があまりに【参考歌】の下句と酷似していることを難じたもの。

⑨病―歌病のこと。ここでは上句「人とはて」（人が訪れないで）と下句「跡見ぬ」（人の足跡がない）の意味が重なっていることから、同心病と指摘する。動詞の意味の重複を同心病として難する先行例には、「ながめこし沖つ浪まのはまひさぎひさしく見せぬ春霞かな」（建仁元年三月『新宮撰歌合』霞隔遠樹・二番左・三・良経）に対する俊成の判「上にながめこしとおきて下に見せぬといへる、同心の病

かいかが」等がある。

⑩不及申勝負歟―左歌、右歌のそれぞれに難点があるためこの勝負は持とされたか。尚、当該歌合においてはこの番のように勝負記載のない番がままみえる（五・八・一〇・二三番）。

【通釈】

二番

左

入道従三位伊成

ただでさえ人の往来がめつたにない故郷の吉野の山も雪が降っているらしい（だから、更に故郷の人の往来がなくなるのだろうか）。

右

従三位藤原伊忠

人が訪れないままで、里はすっかり古びてしまった、（そこに私の住んでいる）宿はあるので（そんな宿に降り積もっているからこそ）いつであつても足跡（訪問の形跡）を見ない庭の雪であるよ。

【判詞】左歌は、下句（の「よしの、山もみ雪ふるらし」）が『古今和歌集』の歌（の下句とよく似ています）でしょうか。右歌は、「人とはて」「あと見ぬ」は、（同心の）歌病でございませうか。（どちらも同じように欠点があるので）勝ち負けを申し上げるに及ばないか。

〈三番〉

【本文】

三番

左 持

従三位藤原顕氏

此ころはあしのやへふきそれよりもひまなくつもる夜はのしら雪

右

左近衛権少将藤原忠兼

⑥一もとの姿はそれとも見えぬまてみの、を山は雪ふりにける

⑧左歌、和泉式部かこやとも人をといふ歌をもと、し、右は、

いせの御このみのを山の縁を撰せられたる、をのく

優美に侍を、右、初五字に一本のと侍る、本歌のひとつ

姿といへるよりはすこしみに、にたつ心ちし侍に、左もまた、

腰の五字心ゆるすそ、いつれと申かたし

【他書所伝】

〈左歌〉ナシ 〈右歌〉ナシ

【本歌】

〈左歌〉

『後拾遺和歌集』恋二・六九一・「題しらす」・和泉式部  
つのかにのこやとも人をいふべきにひまこそなけれあしのやへふき

〈右歌〉

『新古今和歌集』恋歌五・一四〇八・「題しらす」・伊勢

おもひいづやみのを山のひとつ松ちぎりしことはいつもわすれず

【語釈】

①従三位藤原顕氏―顕家男。当該歌合の判者を勤める知家（蓮性）の弟。家名は紙屋河。承元元年（一一〇七）生。当該歌合催行時は四〇歳。建長四年（一一五二）正三位、正嘉元年（一一五七）従二位に至り、非参議であった。『吾妻鏡』にもその名がみえ、正嘉元年頃から関東に出仕していたことが知られる。弘長元年（一一二六）『宗尊親王百五十番歌合』に出詠し『東撰和歌六帖』にもその詠が採られる等、関東においては主に歌人として活躍した。また、自撰と思われる家集『従二位顕氏集』にも鎌倉歌壇での詠作が収載されている。寛喜四年（一一三二）『石清水若宮歌合』、嘉禎二年（一一三六）『石清水五首歌合』、宝治元年（一一四七）頃「住吉社三十六首」、宝治二年『宝治百首』、建長三年『影供歌合』、正嘉三年『北山行幸和歌』等に出詠。『万代和歌集』、『秋風抄』、『現存和歌六帖』、『秋風和歌集』、『秋風抄』との重複歌、『雲葉和歌集』等の作者。文永十一年（一一七四）一月八日没、六八歳。『続後撰和歌集』以下の勅撰集に一一首入集。

②あしのやへふき―葦で幾重にも隙間なく葺いた屋根のこと。葦は摂津国の景物。

【本歌】で挙げた和泉式部の詠に影響を与えたと思われる「つこの国のあしのやへふきひまをなみこひしき人にあはぬ比かな」（『古今和歌六帖』一一五八「くに」）や、

「ひまなくぞなにはのこともなげかるるこやつのにのあしのやへぶき」(『相模集』五七三・「雑」) 等のように隙間がないことから「ひま」のないことの比喩表現として用いられる。

③ **ひまなくつもる** — (雪が絶え間なく降って) 隙間なく積もる意を表す。「ひま」は、「かまどやまゆきはひまなくふりしけど火のけをちかみたまらざりけり」(『好忠集』三二五・「十一月中」)、「吉野山ゆきふるほどのひまもなくおぼつかなくやながめやるらん」(『定頼集』一四七・「おなじころ、をとこ、かすがへいきたる人に」) 等のように絶え間ない様子を表す時間的な意の場合と「みづとりのつららのまくらひまもなしむべさえけらしとふのすがこも」(二度本『金葉和歌集』冬・二七五・「氷満池上といへることをよめる」・経信) のように隙間のないことを表す空間的な意の場合があるが、ここでは「山里にくずはひかかる松がきのひまなく物は秋ぞかなしき」(『新古今和歌集』雑歌・一五六九・「題しらず」・好忠) のようにどちらの意も持つものとして考える。

④ **夜はのしら雪** — 夜中の雪。「夜は」は夜中を指し、「しら雪」は雪の美しさを強調した語。「さえわたるよはのけしきにみやまべの雪のふかさを空にしるかな」(『千載和歌集』冬・四四七・「百首歌の中に、雪のうたとよませ給うける」・季通) 等のように「夜は」と「雪」が共に詠まれる例は少なくないが、「夜はのしら雪」の形で詠まれる例は少なく、「むねよわみふくあらしのおとたえぬつもらばはらへよはのしら雪」(『出観集』冬・六〇三・「雪のこころを」) がその早い例かと思われる。

⑤ **左近衛権少将藤原忠兼** — 忠行男。権中納言盛兼の養子となる(『尊卑分脈』)。当該歌合に出詠の伊忠は兄弟。その縁戚関係から、近衛家との繋がりが見取される。二番【語釈】⑥参照。家名は楊梅。生没年未詳(『統古今和歌集目録』故者にみえないため文永三年三月頃には生存か)。承久三年(一二二二) 叙爵後、嘉禎三年(一二三三) 従四位下(鷹司院嘉禎二年御給)、建長三年には従三位となり、建長五年出家。当該歌合の他には、宝治元年(一二四七) 頃「住吉社三十六首」等に出詠。『万代和歌集』、『秋風抄』、『現存和歌六帖』、『秋風和歌集』(『秋風抄』との重複歌) 等の作者。勅撰集には『統古今和歌集』以下一二首入集。

⑥ **一もとの姿** — 「ひともとの松のちとせもひさしきにいつきの宮ぞ思ひやらるる」(『拾遺和歌集』雑春・一〇二五・「齋院子の日」・順) や「ひともとのまつ」しるしぞたのもしきふた心なきちよとみつれば」(『後拾遺和歌集』賀・四三一・「屏風の絵に、うみのほとりに松ひととあるところを」・兼澄) のように、一本の松のことを指す。

⑦ **みのゝを山** — 「美濃の中山」ともいう。美濃国(岐阜県)にある南宮山のことを指し、「わがこふるみののをやまのひとつ松ちぎりし心いまもわすれず」(『古今和歌六帖』山・八六八) 等、「一つ松」を景物とする。「みのゝを山」を詠み込む例はあまりみられず、中でも「雪」を共に詠んだものは極めて少ない。後の例に「雪ふかきみののを山のさびしきに松の心ぞひとりしらるる」(『嵯峨の通ひ路』二四・安嘉門院) 等がある。

⑧ **左歌、和泉式部かこやとも人をといふ歌をもととし** — 左歌の【本歌】を指摘している部分。尚、『新編国歌大観』は「こやとも人をといふみのを」とするが、底本を確認したところ「こやとも人をといふ歌を」と判読し得る。文脈上からもその方が妥当と判断し「歌」として解釈する。

⑨ **右は、いせの御このみののを山の縁を撰せられたる** — 【語釈】⑧と同様に、右歌の【本歌】を指摘している部分。尚、この伊勢の詠はよみ人しらずとして「わがこふるみののをやまのひとつ松ちぎりし心いまもわすれず」(『古今和歌六帖』山・八六八) という形でもみられるが、ここでは判詞の指摘に従い、伊勢の作として『新古今和歌集』の本文を【本歌】として採用した。「いせの御こ」は、「伊勢の御もかうこそはありけめとをかく聞こゆるも」(『源氏物語』総角、本文は小学館「新編日本古典文学全集」に拠る) や「これは伊勢の御が中務の君にかくよむべしといひける也」(『新撰髓脳』、本文は岩波書店「日本古典文学大系」に拠る) 等から鑑みるに、「いせの御」の誤りかと思われる。また、『新編国歌大観』では「みののを山の縁」とするが、底本を確認すると「みののを山の縁」と判読しうるため、ここでは「縁」として解釈する。「縁を撰せられたる」とあるのは、【本歌】の「ちぎり」という表現を踏まえての事か。

⑩ **初五字** — 初句を指す。「あやめつつ人しるとてもいかがせむ忍びはつべき涙なら

ねば」(文治三年頃『御裳濯河歌合』廿五番左・四九・西行)に対する俊成の判詞「左、しのびはつべきといへる末の句はいとをかし、初五字や如何にぞ聞ゆらん」等の例がある。

⑪み、にたつ心ちし侍―「かねておもふわりなかるべき名残かなあかれぬ花もねにかへりなば」(『六百番歌合』春部・残春・廿七番左・一七三・季経)に対する俊成の判詞「右方申云、左歌、あかれぬ、詞みみにたつ」のように、表現や語句が耳障りなことを難じて言う語。「心ちし侍」とあることから、判者自家自身がそのように感じている旨が強調されている。

⑫腰の五字心ゆるすそ―「腰の五字」は第三句を指す。「わがこひははれゆくまのそらのくもよそにのみしてきえぬべきかな」(『六百番歌合』恋部下・寄雲恋・一番左・九二二・有家)に対する俊成の判詞「右申云、左歌、腰五字ささへたり」や、後の例ではあるが「類なき花より後のめうつりもなぐさむほどにさける山ぶき」、「なにとこの花をみすてし心もて紅葉のころは雁のなくらん」(建長八年『百首歌合』春秋・三百九番・六一七、六一八・伊長、具氏)に対する知家の判詞「両首の腰の五字、いとしもなく侍るにや、可謂同品歟」等があり、ここでは左歌の「それよりも」を指す。また、「心ゆるすそ」は【語釈】⑪同様、「それよりも」という語を用いた事に対して判者自家自身が許容しがたいと感じている事を表す。「ゆきもあはぬちぎのかたそぎもる月をしもとやかみのおもひますらむ」(嘉応二年『住吉社歌合』社頭月・十四番左・二七・経正)に対する俊成の判詞「左、すがたは優にみゆるをちぎといへること、あるところのうたあはせに、基俊のきみといひし判者にて、ゆるさずぞいひて侍りし」等の例がある。

【通釈】  
三番

左 持

従三位藤原顕氏

近頃は、(幾重にも葺かれた)葦の八重葺きの屋根よりも(絶え間なく降って)隙間なく積もる夜の真つ白な雪であるよ。

右

左近衛権少将藤原忠兼

一本の松がそれと見えないくらいに美濃の御山は雪が降り積もっていたことだ

なあ。

【判詞】左歌は、和泉式部の「こやとも人を」という歌を本(歌)とし、右歌は、伊勢の御の「みののを山」の縁を(本歌として)選ばれている(のが)、それぞれ優美でございませぬのを、右(歌)は、初句に「一本の」とございませぬ。本歌が「ひとつ奈」といつているよりは少し耳障りな心地が致しますが、左(歌)もまた、第三句目は(私自身の)心が許すだろうか、どちらとも(勝負を)申しがたい。

### 〈四番〉

【本文】

四番

左

① 権大僧都尊海

住わひてよにふる道もたえぬへし妻木の山をうつむしらゆき

右 勝

② 権大僧都尊家

ときしあれは神も心やなひくらんさか木葉したりふれるしら雪

③ 左、つま木の山と侍は、た、樵夫の爪木こる山かも、もし

④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨ ⑩ ⑪ ⑫ ⑬ ⑭ ⑮ ⑯ ⑰ ⑱ ⑲ ⑳ ㉑ ㉒ ㉓ ㉔ ㉕ ㉖ ㉗ ㉘ ㉙ ㉚ ㉛ ㉜ ㉝ ㉞ ㉟ ㊱ ㊲ ㊳ ㊴ ㊵ ㊶ ㊷ ㊸ ㊹ ㊺ ㊻ ㊼ ㊽ ㊾ ㊿

① ② ③ ④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨ ⑩ ⑪ ⑫ ⑬ ⑭ ⑮ ⑯ ⑰ ⑱ ⑲ ⑳ ㉑ ㉒ ㉓ ㉔ ㉕ ㉖ ㉗ ㉘ ㉙ ㉚ ㉛ ㉜ ㉝ ㉞ ㉟ ㊱ ㊲ ㊳ ㊴ ㊵ ㊶ ㊷ ㊸ ㊹ ㊺ ㊻ ㊼ ㊽ ㊾ ㊿

① ② ③ ④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨ ⑩ ⑪ ⑫ ⑬ ⑭ ⑮ ⑯ ⑰ ⑱ ⑲ ⑳ ㉑ ㉒ ㉓ ㉔ ㉕ ㉖ ㉗ ㉘ ㉙ ㉚ ㉛ ㉜ ㉝ ㉞ ㉟ ㊱ ㊲ ㊳ ㊴ ㊵ ㊶ ㊷ ㊸ ㊹ ㊺ ㊻ ㊼ ㊽ ㊾ ㊿

【他書所伝】

〈左歌〉ナシ 〈右歌〉ナシ

【語釈】

① 権大僧都尊海―生没年未詳(『続古今和歌集目録』には現存歌人として名がみえ、少なくとも文永三年三月頃までは生存)。興福寺の僧。同じく興福寺の別当権僧正定玄男。当該歌合一番出詠の資季は従兄弟にあたる。興福寺の法印、権大僧都、元興寺別当となる。『栴葉和歌集』、『人家和歌集』、『現存和歌六帖』、『秋風和歌集』、『万代和歌集』等の作者。『南都現存集』(散佚)を撰した。勅撰集には『続後撰和歌集』以下四首入集。

②住わひて―「すみわびて身をかくすべき山ざとにあまりくまなき夜はの月かな」  
〔千載和歌集〕雑歌上・九八五・「山家月といへるころをよみ侍りける」・俊成  
にみられるように、世の中に住むことが辛くなることをいう。

③よにふる道―「しりぬらむゆききにならすしほつ山世にふるみちはからきもの  
ぞと」〔紫式部集〕二三・「しほつ山といふみちのいとしげきを、しづのをのあや  
しきさまでもして、なほからきみちなりやといふをききて」や「つま木こる山  
ぢは雪のふかければよにふる道もたえやしぬらん」〔林葉和歌集〕冬歌・雪埋樵  
路歌林苑・六〇八）のように何度も人やものが往来して均され古くなった道（世に  
旧る）の意と俗世にあつて暮らす（世に経る）意を掛けたもの。

④妻木の山―美濃国の歌枕。判詞での記述にあるように、同音の語に樵夫が薪を  
集める山という意の「爪木の山」がある。「すみわびぬ今は限と山ざとにつまぎこ  
るべきやどもとめてむ」〔後撰和歌集〕雑一・一〇八三・「世中を思ひうじて侍り  
けるころ」・業平）のように、俗世から離れたことをあらわす語としても用いられ、  
当該歌では後者の用法かと思われる。用字については明確な区別がなく、「鳥かへ  
る谷のとほそに雪ふかし妻木こるをのみちやたえなん」〔後鳥羽院御集〕冬十五首・  
三六六）のように混同されがちである。

⑤うつむしらゆき―「けふよりは稀にも人の問はざらん行きかふ道をうづむしら  
雪」〔洞院撰政治家百首〕冬・雪五首・九八七・但馬）等。「しら」は雪の美しさを  
強調する。

⑥権大僧都尊家―生没年未詳。顕家の男で兄弟に当該歌合出詠の知家、顕氏がある。  
比叡山の阿闍梨、寛元元年（一二四三）権少僧都から権大僧都へ任ぜらる。日光別当。  
建長五年（一二五三）『三首歌合』に勸進。『東撰和歌六帖』、『人家和歌集』等の作者。  
勅撰集へは『続古今和歌集』に一首入集するのみ。

⑦ときしあれば―「ときしあればふるきのすゑにさくはなもむかしのはるやおも  
ひいづらん」〔浄照房集〕二六・「蓮花心院を見侍るに、さくらさかりなり、こ左  
おとど花のさかりはかならず御覽せし、思ひいでて」等。当該歌では歌合催行の  
時そのものを念頭に置いているか。

⑧神も心やなひくらんさか木葉したりふれるしら雪―「けふまつる神の心やなび

くらむしで浪立つさほの河風」〔新古今和歌集〕神祇・一八九六・「文治六年女  
御入内屏風に、春日祭」・兼美）は、神が心を動かしていることを、自然現象によ  
り感じ取っている例。「ゆきふれば神のしるしやこれならんしらゆふかけぬさかき  
ばぞなき」〔承安二年〕『広田社歌合』社頭雪・八番左・一五・成範）では「さかき  
葉」に雪が積もる様子を神応のしるしであるとする。当該歌では神の葉がしだれ  
るほどふる真つ白な雪に、神の感応を推し量っている。

⑨つま木の山と侍は、た、樵夫の爪木こる山かも、もしまたか、る名所の侍やら  
ん、おほつかなく―後の例ではあるが「よとともにもすむはつま木の山なればなき  
てや鹿の秋は過ぐらん」〔歌枕名寄〕未勘国上・九二九二・「爪木山」・よみ人し  
らず）のように、妻木山が歌枕の名所であることからきた判詞か。本文の「妻木  
の山」が爪木の山か妻木の山か判断しづらい、ということかと思われるが【語釈】  
④で述べたように、用字は混同されがちな為、当該歌では特定の山（美濃の妻木山）  
を指す語ではないと思われる。

⑩真木の葉したりと云歌―該当する和歌が無いので誤写もしくは散佚歌か。

⑪神明のなひきたまはらうへ―「神明」は神を指す語。「しもならで月もるよひや  
かたそぎのゆきあはぬひまもかみはうれしき」〔嘉応二年〕『住吉社歌合』社頭月・  
廿五番右・五〇・家佐）に対する俊成の判詞、「うたさまはをかしきを、かたそぎ  
のゆきあひの月ばかりをうれしともみそなはずべきにあらず、神明のかぎりなき  
やそのしまわのほかまでこそまもりおまませ」が例としてあげられる。神が心  
を寄せなさるであろううえに、の意。

⑫凡下の不及是非歟―「凡下」は特に優れたところが無い人、凡人を指す。判者  
が自身のことを卑下したもの。「是非」は後の例であるが「かづらきやあすかの河  
の春風に花の岩こす浪のまもなし」〔建長八年〕『百首歌合』春・二百七十四番左・  
五四七・家良）に対する知家の判詞「左あすかの河の春風、こと葉のきこえあさ  
らかに侍り、右又紅葉ながれて行く秋のと侍る、よみすまされて侍れば、これは  
是非申さむにつけてかたはらいたく侍れば、人人の御はからひにて侍るべし」の  
ように、和歌の勝敗のことをいい、判者自身が和歌の勝敗を判定するには及ばな  
いということが。



【通釈】  
四番

左

権大僧都尊海

住むことがつらくなって使い馴らされた古い道（俗世にあつて暮らす道）も絶えてしまつていよう。妻木の山を埋めている。この白雪で。

右勝

権大僧都尊家

この時が到来したので、神も心を寄せていようか、榊葉がしだれるほどに真つ白な雪が降りつもつている。

〔判詞〕左（歌の）、妻木の山とございませぬのは、単に樵夫が爪木を集めるための山を指しているのだろうか、もしくはあは（美濃国にある）名所（の妻木の山）でございませぬでしょうか、はつきりとしませぬ。右（歌の）、榊葉しだりという詞は「真木の葉しだり……」という歌を思い出されませぬが、神が心を寄せなされるであらううえ、（凡人である）私の判定には及ばないだらうか、（右歌が）勝ちでしょう。

〔五番〕

【本文】

五番

左<sup>①</sup>

神祇大副卜部兼直

年つもるゆきあひの間にふる雪のかさねて見する千きのかたそき<sup>⑤</sup>

右

沙弥最智

立けふりいかにゆれは富士のねに年ふる雪のきゆる日もなき<sup>⑧</sup>

左歌、うるはしくことなる無失や侍らん、右歌は、初の五字

立けふり、彼あさまのたけにたつ煙には、こよなくおとり

侍うへに、雪もあまりふりて、千木のかたそきは只今の

景気めつらしくや侍へき

【他書所伝】

〔左歌〕ナシ 〔右歌〕ナシ

【参考歌】

〔右歌〕

『伊勢物語』八段（本文は「新潮日本古典集成」）

むかし、男ありけり。京や住み憂かりけむ、東のかたにゆきて住みどころ求むとて、友とする人ひとりふたりしてゆきけり。信濃の国、浅間の嶽に、けぶりの立つを見て、

信濃なる浅間の嶽に立つけぶり

をちこち人の見やはとがめぬ

○『新古今和歌集』羈旅歌・九〇三・「あづまの方にまかりけるに、あさまのたけに煙のたつを見てよめる」・業平

しなのなるあさまのたけに立つけぶりをちこち人のみやはとがめぬ

【語釈】

①左―底本には勝負付がみえない。判詞から左歌の勝と推定される。

②神祇大副卜部兼直―兼茂男（『明月記』正治元年三月二五日条では「卜部兼直（父兼貞譲）」と、「尊卑分脈」では祖父にあたる兼貞を父とする）。生没年未詳（『続古今和歌集目録』では故者に入る）。藤原顕氏、藤原秀能、素俊（橘家季）といった同時代歌人との交流が彼らの歌集（『従二位顕氏集』、『如願法師集』、『榊葉和歌集』）から知られる。また、『明月記』では特に天福元年（一一三三）以降、定家邸への来訪記事が散見する。その縁もあつてか、嘉禎元年（一一三五）に最終的な成立をみる『新勅撰和歌集』に一首入集し勅撰歌人となる。反御子左派との交流もみえ、当該歌合や、宝治元年（一二四七）頃真観（光俊）勸進の「住吉社三十六首」への出詠が確認される他、『万代和歌集』、『現存和歌六帖』、『秋風和歌集』、『雲葉和歌集』等の真観や基家らによる各私撰集、秀歌撰への入集が確認される。和歌関係の著作としては、『曩祖御詠歌集拔書』、『八雲神詠口訣』が知られる。神祇の有識家としての一面もあり、建永元年（一一〇六）書写の『日本書紀』、元仁二年（一一二五）書写の『古語拾遺』は著名。勅撰集に一首入集。

③年つもる―「つもる」は雪の縁語。「としつもる雪のくれこそかなしけれいかなる人の春をまつらむ」（『道助法親王家五十首』冬・惜歳暮・八二四・定範）、後の

例に「あらましのとしつもりぬるゆきなれど心とけてもけふぞおほえぬ」（『弁内侍日記』二二七・後深草院）。

④ **ゆきあひ**——「ゆきあひ」は、二つのものや事柄が出会うこと。当該歌では、「夜やさむき衣やうすきかたそぎのゆきあひのまより霜やおくらむ」（『新古今和歌集』神祇歌・一八五五・左注に「住吉御歌となん」）のように、下の句にみえる「千き」（千木）が交わっている意。また、当該歌合の催行時期を念頭に、冬と春とが交差する意も響かせる。

⑤ **ふる雪**——神からの予祝の意を含むか。四番【語釈】⑧参照。

⑥ **千きのかたそぎ**——「千き」（千木）は、神社建築の大棟上で交差する二本の木。「かたそぎ」（片削）は、千木の片端を縦に切り落とすこと。ここでは後の例ではあるが、「久方のあまのつゆじもいくよへぬみもすそがはのちぎのかたそぎ」（『続後撰和歌集』神祇歌・五四二・「神祇歌の中に」）・後鳥羽院）、「あまくだる神やねがひをみつしほのみなとにちかきちぎのかたそぎ」（『玉葉和歌集』神祇歌・二七九〇・熊野新宮にてよみ侍りける）・師光）等のように、春日若宮社そのものを指すか。

⑦ **沙弥最智**——『明月記』嘉祿二年三月一日条によれば、生年は承元四年（一一二〇）。没年は未詳。俗名源家清。家長息。従五位上右兵衛尉。後に出家（出家年次は未詳）。父家長は、建久七年（一一九六）後鳥羽院に出仕し、以後、院藏人等を歴任し、また『新古今和歌集』撰集の折りには、和歌所開闢となり編纂事務にあたる等、後鳥羽院との繋がりが強かった。その家長は承久の乱後、官を辞するも、なお隠岐に配流された後鳥羽院と音信を持った。家清は、父家長や家長室の後鳥羽院下野らとともに嘉禎二年（一二三六）『遠島御歌合』に出詠する等、いわゆる後鳥羽院旧臣グループとして位置づけられる。乱後、家清は九条道家の家人になり、家長女は道家女藻壁門院の女房となる等、九条家への接近が確認される。一方、家長は家清を定家に引き合わせる（『明月記』嘉祿三年三月一日条）等しているが、『新勅撰和歌集』には入集せず、勅撰集には『続後撰和歌集』以下に七首入集。寛喜四年（一二三三）『石清水若宮歌合』、貞永元年（一二三三）七月、九条道家主催「光明峰寺撰政治家歌合』等に出詠。また『秋風和歌集』、『雲葉和歌集』、『現存和歌六帖』等の作者。

⑧ **もゆれば**——「燃ゆれば」。ここでは富士の煙を念頭に置く。もともと活火山であった富士と火口から燃え立つ煙とを組み合わせた作例は多くみえる。『建保名所百首』（雑二十首・不尽山駿河国）の、「ふじのねに時ぞともなく立つ煙遠近人もおもなれぬらん」（九八五・順徳院）、「白妙の山はふじのね時しらぬいく世の雪に煙たつらん」（九八六・行意）、「あまのはらふじの柴山しばらくも煙たえせず雪もけなく」（八七・定家）、「くらべみむわがみよふじの山ならばたえぬ煙にたへぬべきかな」（八八・家衡）、「人すまぬ山はふじのねいつとなくたつるや何の煙なるらん」（九〇・兵衛内侍）、「ふじのねの嵐になびく夕煙のほりもやらぬ身をいかにせん」（九二・忠定）、「よとともにつかはきえむふじの山煙になれてつもる白雪」（九四・範宗）、「よとともにつかはきえむふじの山煙になれてつもる白雪」（九五・範能）等はその一例。

⑨ **富士のねに年ふる雪**——富士は駿河国の歌枕。「年ふる」は「年来」「長年」の意。また「降る」を掛ける。富士の嶺が常に雪をいただいているという詠は「天地の分けし時ゆ 神さびて 高く貴とき 駿河なる 富士の高嶺を 天の原 振り 投げ見れば 渡る日の 影も隠らひ 照る月の 光も見えず 白雲も い行きはばかり 時じくぞ 雪は降りける 語り継ぎ 言ひ継ぎ行かむ 富士の高嶺は」（『万葉集』巻第三・雑歌・三二〇・山部宿禰赤人、富士の山を望む歌一首并せて短歌・赤人）等、『万葉集』以来詠がみえる。

⑩ **うるはしく**——一首全体が整っていて調和のある美しさをいう歌論用語。当該歌合では、一番左の資季詠「君が代のさかへてほどをふりつもる今年の雪のふかさにぞしる」に対して「左歌、風体うるはしくてよろしう侍る」と評する。

⑪ **彼あさまのたけにたつ煙には、こよなくおとり侍**——『伊勢物語』八段所載の男主人公の詠を念頭に置いた評。【参考歌】参照。

⑫ **雪もあまりふりて**——富士の高嶺に恒常的に降り積もる雪の様を言い立てすぎた点を難じたものか。『六百番歌合』（夏部・蟬・廿六番左・二九一）では、有家が「くもるまでひびきやすらんつやまの峰よりたかきせみのものごゑ」と蟬の声が響き渡る様を詠じたものについて、俊成が「左歌、蟬のあまりにきこえ侍る」と、誇張表現が過ぎることを難じている例がみえる。

【通釈】

五番

左

年が積もり冬と春が行き合うこの時節に、千木の交差するすき間に降り積もる雪とを重ねて見せる、(この春日若宮社の) 千木の片削ぎ。

神祇大副卜部兼直

右

立つ煙がどのように燃えているからなのであろうか、富士の嶺に久しく降る雪が消える日(火も)もない。

沙弥最智

〔判詞〕左歌は、よく整っていて取り立てて欠点はないでしょうか。右歌は、初めの五字「立けふり」(は)、あの『伊勢物語』の「あさまのたけにたつ煙…」には、はなはだしく劣ります上に、雪も甚だしく降って、(一方左歌の)「千木のかたそき」は只今日に浮かぶ(春日若宮社の)様が珍しくございますでしょうか。

〈六番〉

【本文】

六番

左

恋あへるあかりやいつく軒端<sup>③</sup>までもつよりふたがる庭のゆきかな

① 前備後守藤原信実

右勝

神さふるならのたむけに見るまでにさほすきゆけはみゆきつもりて

④ 積真観

左右の歌、義実文華あひかねて、珍重殊勝に侍へし、凡

俗のおもひよるへきさるならず、但、左歌、あかりやいつくこと

侍こそ、孫康か窓にあつめけんも、昼をてらす光なく

は、そのようななくや、又ふる雪にひましらむなとこそは

ふるくもよみて侍めれ、此所にはこの心たかひて、雨の夜

の窓の心ちし侍り、右歌、ならのたむけ誠に

⑤ あつらしく、すかたも媛艶にて秀逸と見え侍り、尤可為勝

【他書所伝】

〈左歌〉

『信実集』一〇二・「かすかの歌合に」

窓あくるあかりやいつく軒ばまでもつよりふたがる庭の雪かな

【参考歌】

〈右歌〉

『万葉集』卷第三・雑歌・三〇〇・「長屋王、馬を奈良山に駐めて作る歌二首」・長屋王

佐保過ぎて奈良のたむけに置く幣は妹を目離れず相見しめとそ

【語釈】

① 前備後守藤原信実―はじめ隆実、のちに信実となる。法名は寂西。生没年未詳(『続古今和歌集目録』には現存歌人として記載されており、文永三年三月頃には生存か)。右京権大夫正四位下藤原隆信男。母は中務少輔藤原長重女。為繼、藻壁門院少将、弁内侍、後深草院少将内侍の父。為繼と藻壁門院少将は当該歌合出詠歌人である。経歴は正四位下、左京権大夫、中務権大輔、備後守に至る。信実の父隆信は、定家と母を同じくするので為家は従兄弟にあたる。父親とともに似絵の名手としても知られる。和歌活動としては、正治二年(一一二〇)『院当座歌合』、建保六年(一一二八)『道助法親王五十首和歌』、宝治二年(一一四八)『宝治百首』等に出詠する。『万代和歌集』、『檜葉和歌集』等の作者。家集に『信実集』がある。

『今物語』の編者。為家を判者に迎え、寛元元年(一一四三)『河合社歌合』を勸進。一方、為家と対立した知家や真観ら反御子左派とも交流があり、当該歌合への出詠や真観との建長三年(一一五二)『閑窓撰歌合』共撰はその一例。勅撰集には『新勅撰和歌集』以下、一三二首入集。

② 恋あへる―【他書所伝】に挙げた『信実集』では初句に異同がみられ、そちらの方が判詞との整合性もとれるため、「窓あくる」として解釈する。「さよふけて窓おしあくるうたたねの枕すずしき庭のまつ風」(『拾玉集』一九三一・「夏臥北窓風、枕席如涼秋」)。

③ 軒端までもつよりふたがる庭のゆきかな―後の例ではあるが「いくへとも庭には

見えぬ白雪のつもれる程を軒ばにぞしる」(『統現葉和歌集』冬歌・五〇二・兼胤)や「冬ごもり人もかよはぬ山ざとのまれのほそみちふたぐゆきかも」(『賀茂保憲女集』一二三)のように、軒端の高さまで雪が降り積もって庭を塞いでいる様子をあらわす。

④ 積真観―藤原(葉室)光俊。建仁三年(一一〇三)に生まれ、建治二年(一二七六)七四歳没とされている(諸説あり)。権中納言藤原光親男。母は参議藤原定経女(順徳院乳母従三位経子)。当該歌合出詠歌人である尚侍家中納言、鷹司院帥、中納言弟は真観の子にあたる。中納言弟については十二番の【語釈】③を参照。右少弁、藏人を経て、承久三年(一一二二)、承久の乱で父光親が処刑され、自らは筑紫へ配流される。その翌年の貞応元年(一一二二)に帰京。正四位下、右大弁にいたる。寛喜・貞永頃に定家の門に入る。嘉禎二年(一二三六)に出家。為家とも親交があったが、定家没後次第に対立を深め、当該歌合催行以後連性らと共に反御子左派として活躍した。和歌活動としては貞永元年(一二三二)『洞院撰政家百首』、寛元元年(一二四三)『河合社歌合』、宝治二年(一二四八)『宝治百首』等に出詠。『石間集』、『秋風和歌集』、『現存和歌六帖』、『万代和歌集』等の撰者とされている。当番左歌の詠者である信実とは親しく交流があったようで、建長三年(一二五二)『閑窓撰歌合』を共撰している。晩年の自撰家集に『閑放集』、また歌論に『簸河上』がある。一方、文応元年(一二六〇)末に関東に下り、宗尊親王の和歌師範としても活躍。宗尊親王の庇護を受けて『続古今和歌集』の追加撰者の一人となる。文永三年(一二六六)宗尊親王の失脚とともに歌壇から遠ざかるが、建治元年、為家の没後再び返り咲き、最晩年は歌壇の第一人者であった。勅撰集には『新勅撰和歌集』以下一〇〇首入集。

⑤ 神さふるならのたむけ―「神さふる」は神々しい様子であることを表すのに加え、「さりととも頼む心は神さびて久しくなりぬ賀茂の瑞垣」(『千載和歌集』神祇歌・一二七二)「百首歌の中に、神祇歌よみ給ひける」・式子内親王)のように年を経て古めかしくなる、ということを表す。「たむけ」は「神がきにしらゆふかけてふるゆきやあまつみそらのたむけなるらん」(承安二年『広田社歌合』社頭雪・廿四番左・四七・邦輔)のようにはなむけの品を指す。神秘的な古都である奈良への

はなむけ、の意。

⑥ さほ―大和国の歌枕。佐保。平城京の北東の山麓地一帯を指す地名。佐保山は春日からみて北西に位置する。【参考歌】の作者の長屋王は佐保を過ぎて平城山越えにかかると、山上で旅の安全を祈り、手向けに幣を奉ったという。

⑦ みゆきつもりて―「み」は雪の美称。「ふるゆきをそらにぬさとぞたむけつるはるのさかひにとしのこゆれば」(『新勅撰和歌集』冬歌・四四二)「題しらず」・貫之)は雪を、道祖神への捧げ物の幣に見立てて詠んでいる。

⑧ 義実文華あひかねて、珍重殊勝に侍へし―「むさしの草はみながらうづもれてあられに残るささの音かな」(建保五年『冬題歌合』冬野叢・九番左・一七・順徳天皇)に対する判詞、「左、義実文華相兼ねて珍重殊勝のよし、各申之」(衆議判・判詞執筆者は定家)が例として挙げられる。なお建保五年『冬題歌合』で、当該歌合判者である知家は講師を勤めている。

⑨ 凡俗のおもひよるへきさるならず―「さる」は後掲用例のように「さま」の誤写か。「凡俗」は特に優れたところのない様、またそのような人、凡人。「かささぎのわたすやいづこ夕霜の雲井にしろき峰のかけ橋」(建保五年『冬題歌合』冬山霜・一番右・二・家隆)に対する判詞、「右、つねのよろしき歌に侍らば更にさたにおよぶまじく侍るを、雲井にしろき峰のかけはし、又凡俗の思ひよるべきさまには侍らず、と申出で侍りしを」(衆議判、判詞執筆者は定家)のように、判者の謙辞としてみえる。

⑩ 孫康か窓にあつめけんも、昼をてらす光なくは、そのようなくや―「昼(晝)」は「書」の誤写か。孫康が雪の照り返しで窓に光を集めたという故事。「孫氏世録曰、康家貧無油、常映雪讀書。少小清介、交遊不雜。後至御史大夫。」(『蒙求』「孫康映雪」)、「よもすがらすだれをのみぞかかけつるふみみる宿の雪のともし火」(『蒙求和歌』平坂名本・冬部・孫康映雪・五六)「孫康、家貧しくして、油なかりければ、映雪、書を読みけり、少き人に交り遊ぶ事なく、文のみに心を染めける、後に御史大夫にいたりにけり」は、この故事をふまえた例。当該歌では書物を照らす光がないので、そのようにする必要もなく、ということか。

⑫ ふる雪にひましらむなとこそはふるくもよみて侍めれ―先行例として、「ふる雪

にひましらみぬといそぎ出でて明けこそやらねのみちし原」(『月詔和歌集』十月・九三四・「行路雪といふことをよめる」・親宗)等がみえる。

⑫この心―「人はまたおなじいのりをいのもとだだしき道を神はことわれ」(治承二年『別雷社歌合』述懐歌・二番左・一二三・実房) に対する俊成の判詞「左、存故実之風、叶雅頌之時、彼の毛詩、然者頌者美盛徳之形容、以其成功告於神明者也といへる、この心なるべし」のように着想を得た文献の発想の意で「心」を使用している。

⑬雨の夜の窓の心ちし侍り―「あかり」と「雪」を題材にしたものとして孫康の雪案を踏まえた詠や「ふる雪にひましらむ(降る雪で戸等の隙間から明け方の光が入ってきたように見える)」といった詠があるが、信実詠ではその二つのどちらとも発想が違い夜に降る雨を詠んだような感じがする、の意か。「雨の夜の窓」は「秋夜長(あきのよながし) 夜長無眠天不明(よながくしてねぶることなければんもあけず) 耿耿残灯背壁影(かうかうたるのこんのともしびのかべにそむけたるかげ) 蕭蕭暗雨打窓声(せうせうたるくらきあめのまどをうつこゑ)」(和漢朗詠集) 秋・二二三・「秋夜」・白居易)を踏まえて指摘されたもので、この白氏文集を典拠とした一説を下地として詠作された和歌には「あけがたき秋のよなよないくたびか窓うつ雨にめをさますらん」(『永久百首』秋十八首・秋夜・二五六・忠房)、「ながきよはあけやしぬらんおほつかなまどうつあめにおどろかれつつ」(『二条太皇太后宮大式集』上陽人・一二〇)、「つくづくとあけもやられず秋のよはまどうつあめのおとばかりして」(『風情集』秋夜雨・三九六)等の例が散見し、なかなか明けない夜や長夜を詠んだものが多い。信実詠も軒端まで積もった雪で窓から差し込む光が遮られ暗い状況が続く点でそれらの例と共通し、知家もその点を「心ちし侍り」と指摘したか。

⑭あつらしく―「あつらし」は「めつらし」の誤写か。

⑮すかたも媛艶にて―「媛」は「妖」の誤写か。「かりかへるみねのかすみのはれずのみうらみつさせぬはるの夜の月」(『千五百番歌合』春三・百六十六番左・三三三・女房(後鳥羽院))に対する俊成の判詞「左歌、かりかへるといへるより、すがたこころ始終妖艶に見え侍り」にみられるように、優雅である様子を表す。

### 【通釈】

六番

左

窓を開けようと、(部屋あたりに見回すけれど) 明りはどこだろうか。軒端まで積もつて塞がった庭の雪だなあ。

右 勝

積真観

神々しい古都である奈良へのはなむけとみえるまでに、佐保を通り過ぎると、(そこには『万葉集』歌が思い出されるような) 綺麗な雪がつもっていたことよ。

〔判詞〕 左右の歌は、心をそのまま伝え詞を飾る様子を兼ね備えていることが、一段と優れて素晴らしいことでありましょう。凡人の思い至るような様ではない。しかし、左歌(の)、「あかりやいつこ」とありますのは、孫康が(雪の照り返しを)窓に集めたという故事のように、書物を照らす光がなければ、故事の通りになる必要もないだろうか。また「ふる雪にひましらむ」等というのは昔も詠んでいるようでございます、ここではそれらの発想と異なり、「雨の夜の窓」のような感じがします。右歌(の)、「ならのたむけ」という詞は(本当に素晴らしい、歌の姿も優雅で秀逸だと感じられます。よって(右歌を) 勝ちとする。

### 〈七番〉

【本文】

七番

左 勝

春日山み雪しふれはいと、また木すゑをたかくなりまさるらし

右

沙弥信阿

はる秋もとはれのみせは山里の雪にやあとをまついとままし

右、春秋もとはれのみせは雪にや跡を先いとまましと

侍る、すこし心うちにもりてあとはあらはれかたくや侍らん、

左歌は、こしの五字そいますすこしおもふへくやとはき

こゆれと、当社の雪の木すゑは見所や侍るへき、為勝

【他書所伝】

〈左歌〉ナシ 〈右歌〉ナシ

【語釈】

①中務大輔藤原為繼―父は当該歌合の出詠歌人の信実。同じく当該歌合に出詠している藻壁門院少将は姉或いは妹。初名は為忠。法性寺三位とも（『経後卿記』正元元年五月一四日条）。大宮院姑子の家司。建永元年（一二〇六）生。当該歌合催行時は四一歳。当該歌合の他には寛喜四年（一二三二）『石清水若宮歌合』を初めとして寛元元年（一二四三）『河合社歌合』、宝治二年（一二四八）『宝治百首』、建長三年（一二五二）『影供歌合』、弘長三年（一二六三）『住吉社歌合』、『玉津島歌合』等に出詠。『万代和歌集』、『秋風抄』、『現存和歌六帖』、『秋風和歌集』、『雲葉和歌集』等の作者。歌壇では御子左派と反御子左派の対立が深まる中で、父信実らと同じ中間派に身を置いていたとされる。文永二年（一二六五）五月二〇日没、六〇歳（『尊卑分脈』）。『続後撰和歌集』以下の勅撰集に一八首入集。

②春日山―春日大社の背後に連なる山々の総称。春日山は藤原氏の氏神を祀っており、同氏から崇敬されていた。「春日山みやこの南しかぞおもふきたのふぢなみ春にあへとは」（『新古今和歌集』賀歌・七四六）「家に歌合し侍りけるに、春の祝のこころをよみ侍りける」（『良経』）。

③木すゑをたかく―「我が大君 神の命の 高知らす 布当の宮は 百木もり

山は木高し」…（『万葉集』巻第六・雑歌・一〇五三）のように、木々の梢が高いことをいう語「木高し」に權威のさまを寿ぐ比喩としての例がみられる。また、『千五百番歌合』では「かけていへばいとひもすらんかすがやまさりとていかがたのまざるべき」（雑二・千四百五十五番石・二九一一・俊成）に対する判詞に「むかしよりこだかくなれるかすがやまにおちくだりても見ゆるすず舟、尤左負也」とみえる。

④沙弥信阿―平信繁。河内守繁雅男。母は北白河院陳子の乳母。弟に安嘉門院四条（阿仏尼）の父度繁がいる。生没年未詳。『明月記』にその名がみえ、北白河院の使として関東へ下向したことや（嘉祿二年八月廿一日、寛喜二年閏正月十日条）

安嘉門院御幸の際に御衣を調進したこと（安貞元年三月十一日条）等が知られる。また、寛喜二年（一二三〇）には北白河院の当年御給が施されるはずであったが、何らかの理由によりその御給は果たされなかった（正月八日条）。当該歌合以外の歌合・定数歌等には出詠していない。『万代和歌集』等の作者。『新勅撰和歌集』には、後高倉院崩御の後に詠まれた哀傷歌が収められている（雑三・一二五三）。『新勅撰和歌集』以下の勅撰集に三首入集。

⑤はる秋―「春秋もしらぬときはの山ざとはすむ人さへや面がはりせぬ」（『新古今和歌集』雑歌中・一六一七）「題しらず」（元方）のように季節の移り変わりを表す。

⑥山里―山の中の人が住んでいる場所。「山里は冬ぞさびしさまさりける人めも草もかれぬと思へば」（『古今和歌集』冬歌・三二五）「冬の歌とてよめる」（宗于）のように、特に冬の山里は人の訪れのあまりない寂しい場所として詠まれた。

⑦雪にやあとをまついとままし―「あと」は「おもひやれゆきもやまぢもふかくしてあとたえにける人のすみかを」（『後拾遺和歌集』冬・四一三）「法師になりていひむろにはべりけるにゆきのあした人のもとにつかはしける」（信寂）、「けふはもし君もや問ふとながむれどまだ跡もなき庭の雪かな」（『新古今和歌集』冬歌・六六四）「雪のあした、後徳大寺左大臣許につかはしける」（俊成）等のように、人の足跡を指す。雪に足跡をつける行為は「山里の雪には跡もいとほれきとへかし人のさみだれの比」（『慈鎮和尚自歌合』聖真子十五番・五月雨・五番左・七一）や「雪の跡をいとふべかりし故郷をさらにきてみる人となりぬる」（『拾玉集』故郷雪・三九六七）のように本来ならば厭われるものであるが、ここでは人の訪れを希求する。

⑧すこし心うちにもりて―「心こもりて」の例は「身のほのおもふばかりはいはれねどしるらんものを神のこころに」（承安二年『広田社歌合』述懐・十番左・一三五）前齋宮大輔）に対する俊成の判詞「左歌ことばほかにあらはさざれどこころうちにもりて優にきこえ侍り」や「ひとよかす野がみのさとのくさまくらむすびすてける人のちぎりを」、「うらむべきかたこそなけれあづまぢののがみのいはのくれがたのそら」（『六百番歌合』恋部下・寄傀偏恋・十番）

一一五九、一一六〇・定家、寂蓮) に対する俊成の判詞「判云、左の野がみのさと、右の野上のいほ、むすびすてけるといひ、くれがたの空などいへる、ともに心こもりては侍るを」等のように、歌に心や余情がこめられていてよいとする場合に用いられることが殆どであるが、ここではそのような評価ではなく心が十分に詠み出だせていないことを指摘しているか。

⑨あとはあらはれかたく―右歌の第四句「雪にや跡を」を念頭に、縁語関係にある「雪」と「跡」を用いて【語釈】⑧と同様に雪の心が詠み出だせていないことを重ねて評したか。

⑩こしの五字―三番【語釈】⑫参照。左歌の「いと、また」を指す。尚、「いと、また」は「いとどまたあとなき庭と成りぬらんはらふ人なき雪のふる郷」(『土御門院御集』三・「寄雪述懐」)等のように初句に現れることが多く、当該歌のように第三句で用いられる例はあまりみえない。

⑪いますこしおもふへくや―「ゆきもあはぬちぎのかたそぎもる月をしもとやかみのおもひますらむ」(嘉応二年『住吉社歌合』社頭月・一四番左・二七・経正)に対する俊成の判詞「をはりのくもいますこしおもふべくやとみゆ」等のように、表現に今少し心を配るべきだと述べている。

⑫見所―その歌の評価すべき点を指した語で、ここでは直前に「当社の」とあることから春日若宮社の実景を念頭に置いた評と思われる。

【通釈】  
七番

左 勝

中務大輔藤原為繼

春日山に雪が降るので(高い梢に雪が積もって)いっそうまた梢をより高くするに違いない。

右

沙弥信阿

もしも春から秋まで(人に)訪問されるばかりであったとしたら、(冬の今であっても)山里の雪に(人の)足跡がつくことを(他の何よりも)まず厭うだろうか(いや、厭うことはないだろう)。

【判詞】右(歌)は、「春秋もとはれのみせは」「雪にや跡を先いとままし」とござ

います、少し(雪の)心が内に隠れていて足跡は現れにくくございませうか、左歌は、第三句目(の「いと、また」という語)に今少し心を配るべきかとは思われるけれども、当社(春日若宮社)の雪の(積もった)梢は見るに値する所がございませうか、(左を)勝とする。

### 〔八番〕

【本文】

八番

左<sup>①</sup>

左近衛権中将藤原光成

春日山神代ふりにし跡ならし三笠の林<sup>②</sup>につもるしら雪

右

右近衛権少将藤原伊嗣

いまはまた稀にも人をとひかたみ日数ふりぬる庭のゆきかな

右歌、とひかたみなどことごとくしげにきこゆるに、下旬はこと

なる事なくや、左歌、春日山みかさのもり非一所、両方

ちからそへて可為勝

【他書所伝】

〔左歌〕ナシ 〔右歌〕ナシ

【語釈】

①左―底本には勝負付がみえない。判詞から左歌の勝と推定される。【語釈】⑬参照。

②左近衛権中将藤原光成―大炊御門光俊男。母は河内守平繁雅女。当該歌合出詠歌人である信阿(信繁)女を妻とする。生年未詳。承久三年(一一二二)叙爵後、暦仁元年(一一三三)左中将、仁治元年(一一四〇)正四位下を経て文応元年(一一六〇)従三位に至り、文永十一年(一一七四)出家。安嘉門院の院中執務を勤め(『民経記』文永二年六月二五日条)、その御幸にも供した(同四年九月一日条)。当該歌合の他には寛元元年(一一四三)『河合社歌合』、弘長三年(一一六三)『住吉社歌合』、『玉津島歌合』等に出詠。『万代和歌集』、『秋風抄』、『秋風和歌集』

『秋風抄』との重複歌)、『新和歌集』、『雨月和歌集』、『夫木和歌抄』等の作者。『夫木和歌抄』八六九八番の詞書(『家集』)に拠れば家集が存していたか。弘安二年(一二七九)三月二六日没。『続後撰和歌集』以下の勅撰集に九首入集。

③春日山―七番【語釈】②参照。ここでは七番の左歌と同様、春日若宮社の所在地である春日を意識的に詠み込んでいる。

④神代ふりにし跡ならし―神々が国造りをした時代より長い年月が経った(その)形跡であるようだ。「ふり」は「旧り」で、年月の経過を表す。また、「千代の春見るべき花といのりおきてわが身で雪」ともに「ふりぬる」(『源氏物語』幻・五八八・導師)の如く、雪が降る意も響かせているか。「ならし」は「こひしねとするわざならしむばたまのよるはすがらに夢に見えつつ」(『古今和歌集』恋歌一・五二六(「題しらず」)よみ人しらず)のように、軽い推量を含んだ断定の意を表す。

⑤三笠の林―判詞に「みかさのもり」とあることから正しくは「三笠の杜」であると思われ、三笠山の麓にある杜を指す。『古今和歌集』羈旅歌の巻頭に配される仲麿詠に「かすがなるみかさの山」とみえるが、この箇所について古注には「かすがなるみかさの山とは大和国春日山に御笠山としてひきくだりてちいさき山に春日の杜おはします。御笠の杜ともよめり。かすがの森のふもとにあり。されば春日なる御笠の山とよめり」とみえる(『顕注密勘』)。後の例ではあるが、「時雨の雨さしもふればやかすがなる三笠の杜は紅葉しぬらん」(『宝治百首』秋廿首・一九一七・「杜紅葉」・弁内侍)、「くり返しみかさの杜にひくしめのながきめぐみを猶いのるかな」(『続拾遺和歌集』神祇・一四二八・「神祇歌よみけるに」・祐賢)等がある。

⑥つもるしら雪―「しら雪」は雪の美しさを強調した語。清浄なイメージを持つ「しら雪」が「つもる」と詠むことで、「あまくだるそのかみよりやふりくらんゆきつもれりとみゆるたまがき」(承安二年『広田社歌合』社頭雪・十八番左・三五・広季)のように雪が積もると共に杜の悠久な年月の重なりを暗示している。

⑦右近衛権少将藤原伊嗣―父は漢壁門院の院司を勤めた伊平。生没年未詳。当該歌合催行時の寛元四年(一二四六)は従四位上であったと思われる(『葉黄記』正月七日条)。また、同年に行われた春日祭や賀茂臨時祭に参仕している(『民経記』

一月五日、二月二二日曆記)。当該歌合の他には建長八年(一二五六)『百首歌合』に出詠。『秋風抄』、『秋風和歌集』(『秋風抄』との重複歌)、『雲葉和歌集』、『夫木和歌抄』等の作者。勅撰集には『続後撰和歌集』に一首入集するのみ。

⑧人をとひかたみ―人が訪れないので、の意。「ふめばをしふまねば人をとひがたみかぜ吹きわけよ花のしら雪」(『道助法親王家五十首』春・庭花・二二二・公経)。

⑨ふりぬる―「まだきふりぬる雪かとぞ見る」とあれば「神な月おぼる月よのしらぎくは」(『定頼集』六五・「いとあかくしもあらぬ月のをりに菊のいみじうさきみだれたれば、女房などいであて見るとある人のささめきける」)のように、「ふり」には、時間の経過を表す「旧る」と雪が「降る」の意を掛けている。

⑩こと／＼しげにきこゆるに―(「とひかたみ」等という表現の仕方が)大袈裟で勿体ぶっているように思われるがの意。「いりひさすとよはた雲もならず月なきこひのやみしはねば」(『六百番歌合』恋部下・寄雲恋・七番左・九二二・顕昭)に対する俊成の判詞に「左、とよはた雲などはことごとしくはきこゆれど、やみしはねばといひはてたる、後干なるべし」とみえる。

⑪下句はことなる事なくや―「ふえたけのただひとふしをちぎりてよよのうらみをのこせとやおもふ」(『六百番歌合』恋部下・寄笛恋・五番左・一〇八九・定家)に対する俊成の判詞「左歌、よよのうらみをなどいへる、ことふかきやうに聞えながら、さすがに殊なる事なきにや」のように、何かわけがありそうに見えながらもその実大したことはないという意。ここでは、上句の大袈裟な表現の割に下句にはこれといって特別な点が見当たらないことを指摘している。

⑫春日山みかさのもり非一所―「春日山」と「みかさのもり」がそれぞれ神聖な場所として捉えられるため、「みかさのもり」の所在地である三笠山は春日大社の背後に連なる山々の総称としての「春日山」に含まれるものの、一括りにはできないといった意か。

【通釈】  
八番

左  
春日山が神々の時代から長い年月を経た形跡であるようだ。三笠の杜に積もる

左近衛権中將藤原光成



白雪は。

右 右近衛権少将藤原伊嗣

(冬という季節の)今はまた、めったに人が訪れないので(降ってから)何日も経ってしまった庭の雪だなあ。

【判詞】右歌(は、「とひがたみ」等と(いう表現の仕方が)大袈裟で勿体ぶっているように思われるが、下句は大したことはない(だろう)か、左歌は、春日山と三笠の杜は一つの場所ではなく、両方が(歌に)力を加えていて(左歌を)勝とするべきである。

### 〈九番〉

【本文】

九番

左 左近衛権中将藤原経定<sup>①</sup>

人とは、いとひもせまし我宿のみちふりうつむ夜はのしらゆき

右 勝 鷹司院帥

みよし野の山にいる人道もあらしかつふりまさる雪のふかさに<sup>⑤</sup>

左の歌、本の三句のうちにとの字四かさなりてよろし

からすや、基俊は鶴膝など、申して侍めり、ふるくもふかき

難には申侍されと、又とかなきには似すや、いかさまにも右

歌、山にいる人みちもあらしかつふりまさるなど侍る、

ことにをかしくて雪のふかさもまさりてや侍らん<sup>⑩</sup>

【他書所伝】

〈左歌〉ナシ 〈右歌〉ナシ

【本歌】

〈左歌〉

『古今和歌集』冬歌・三三二・「題しらず」・よみ人しらず

わがやどは雪ふりしきてみちもなしふみわけてとふ人しなれば

〈右歌〉

『古今和歌集』冬歌・三三七・「寛平御時きさいの宮の歌合のうた」・忠岑

みよしの山の白雪ふみわけて入りにし人のおとづれもせぬ

【語釈】

①左近衛権中将藤原経定 生没年未詳。従二位参議親定男。正四位下、左近衛中将(尊卑分脈)。文永六年(一二六九)、出家(尊卑分脈)。後嵯峨天皇が即位した仁治三年(一二四二)正月二十日、殿上人となる(『民経記』)。当該歌合以外の歌合・歌会・百首歌等への参加は確認できない。勅撰集には『続後撰和歌集』に一首入集。『続千載和歌集』恋歌五・一五八六番歌にも「藤原経定朝臣」の詠がみえるが存疑。ほかに『万代和歌集』、『新和歌集』に詠がみえる。祖父定輔は妙王院師長に琵琶を学び、父親定は後鳥羽天皇・順徳天皇の琵琶の師であった等、芸に秀でた一家で、経定もまた「彼朝臣(注・経定)は続後撰之比、管弦並に音曲之芸に堪たる要臣(『源承和歌口伝』)と評されたように音曲に優れた人物であった。『御遊抄』には琵琶三回、和琴二回の演奏記録がみえる。また、『弁内侍日記』には建長二年(一二五〇)の豊明節会で雑芸「うばらこき」を謡い、その後為氏らと共に風俗歌「荒田」を謡ったことが記されている。九条家に仕えていた経定は「法性寺禅定殿下(九条道家か)」から『梁塵秘抄口伝集』を預かり受けており、寛元四年(一二四六)八月二十一日に、経定の声楽の師であった源有資に貸し出して(『梁塵秘抄口伝集』卷十奥書)。なお、真観も在俗中九条家に家司として仕えている。

②人とは、いとひもせまし―もしも人の訪れがあるならば(我が家へ続く道を埋める夜半の雪を)嫌がるだろうに。人の訪れがあるのであれば、それを阻む雪を嫌なものだと感じるのだろうが、実際は人の訪れが無いのでこの雪を嫌う必要が無いのだと嘆く。【本歌】や「おしなべて雪のふればわがやど(の)すぎを尋ねて問ふ人もなし」(『後撰和歌集』冬・「題しらず」・よみ人しらず)等は雪が降った為に人の訪れが無いことを詠む例。

③我宿のみちふりうつむ―「宿」は自分が住む家。【本歌】のように、視点人物の住処へと続く道が雪で埋まるさまを詠む。「人とはでこのはにみちはたえにしをな

ほふりうづむにはのしらゆき」(『光経集』五八三・「閑居冬」)等。

④鷹司院帥―父は、当該歌合六番出詠の真観(藤原光俊)。生没年未詳(『続古今和歌集』故者には名がみえないため、文永三年三月頃には生存か)。『葉黄記』宝治二年正月一八日条に「同(注・鷹司院)帥右丞禅門息年十三」とみえ、この記述に従えば嘉禎二年(一二三六)生、当該歌合出詠時は一歳。父真観と共に反御子左派歌人として活動した。当該歌合十二番出詠の尚侍家中納言とは姉妹。同じく十二番出詠中納言弟もまた姉妹か(十二番【語釈】④参照)。鷹司院(近衛長子)に出仕。宝治二年(一二四八)『宝治百首』、建長三年(一二五二)『影供歌合』、建長八年『百首歌合』、文永二年(一二六五)八月十五夜『歌合』等に出詠。『万代和歌集』、『現存和歌六帖』、『秋風抄』等にも歌が採られている。勅撰集には『続後撰和歌集』以下に二首入集。勅撰集の詞書から「弘長元年宗尊親王家百首」(住吉社三十六首)への出詠が確認できる。

⑤みよし野の山にいる人―吉野山は、「みよしのの山のあなたにやどもがな世のうき時のかくれがにせむ」(『古今和歌集』雑歌下・九五〇・「題しらず」)・よみ人しらず)のように隠遁の地として常套的に詠まれていた。

⑥かつふりまさる―「都人がかつふりまさる庭の雪たづねて後のあとはなくとも」(『紫禁和歌集』八六三・「同比(建保四年三月一五日比か)、二百首和歌」)、「こまのあとはかつふる雪にうづもれておくる人や道まどふらん」(『千載和歌集』冬歌・四六三・「行路雪といへるころをよめる」・西住)等のように、次から次へとますます激しく雪が降るさまを表す。

⑦雪のふかさに―雪の深さによって。上句「みよし野の山にいる人道もあらじ」の原因を表す。「とはざらん人もうらみじあたたえてふるののさとのゆきのふかさ」に(『千五百番歌合』冬三・千三十四番右・二〇六七・俊成卿女)等が例。

⑧本の三句のうちにとの字四かさなりてよろしからずや、基俊は鶴膝など、申し侍めり―「本」は上の句の意。「鶴膝」は歌病のひとつで、一首中に同字が四つあるものをいう。元は漢詩の八病のひとつ。ここでは長承三年(一一三四)九月一三日『頭輔家歌合』十番において判者藤原基俊が鶴膝病について言及した事例を指している。基俊は右歌「秋の山峰のあらしに雲はれて空すみわたる有明の月」

(月・二〇・雅親)に対し、「右歌は、一首中帯二巨病、一者蜂腰病之、二者鶴膝病之、和歌作式、准詩門病、立八病、云、一首の中同字三あるを蜂腰、同字四あるを鶴膝者、今于勘此歌、あの字四あり、又のの字三あり、已犯蜂腰鶴膝也者、此巨病也、入和歌腹心、非扁鵲者、誰得痊哉」と、漢詩の八病に準えて蜂腰病・鶴膝病について釈義し、これらは名医扁鵲でなければ治せないほどの巨病であると述べている。

⑨ふるくもふかき難には申侍されと―鶴膝病は、古くから大きな欠点として指摘されてこなかった。『袋草紙』では「頭輔家歌合」十番の判例を挙げ、「予これを案ずるに、不用の事なり。」さくらちるこのした風はさむからでそらにしらぬ雪ぞふりける」(延喜一三年『亭子院歌合』春・二月十首・左・一三・貫之↓「拾遺和歌集」春・六四)。「ら」字四。「はるのくるみちのしるべはみよしのの山にたなびくかすみなりけり」(寛和二年『内裏歌合』春・霞・一・能宣↓「後拾遺和歌集」春上・五)。「る」字三、「の」字四なり。これ等皆歌合の歌なり。その沙汰なく、あるいは持、あるいは勝つ」と述べ、この指摘は不要なものだとしている。

⑩雪のふかさもまさりてや―雪の深さにたとえて、暗に右歌の勝ちを表した。「雲わけし谷の木末も降る雪のそこのみなる天のかご山」「あたたゆる雪のあしたにかき分けて心の行くはこしのしら山」(建久六年『民部卿家歌合』深雪・二番・一四一、一四二・親宗、生蓮)に対する俊成判「右は、思ひやれる越のしらやまは雪深き所なれば、今みる所の雪はただ跡たえたるばかりなり、左、谷の梢もそこに成るらん、ふかきもまさると申すべきや」等が例。

【通釈】

九番

左

左近衛権中将藤原経定

もしも人の訪れがあれば(私は)嫌がるだろうに。我が家に続く道を降り埋める夜半の白雪を。

右勝

鷹司院帥

吉野の山に入る人には道もないだろう。次から次へとますます激しく降る雪の深さで。

〔判詞〕左の歌は、上の句の三句のうち「と」の字が四つ重なっていてよろしくないだろうか。基俊は鶴膝等と申しているようでございます。古くも深い欠点には申してきていませんが、そうかといって欠点がない歌には相応しないでしょうか。どのようにしても右歌、「山にいる人みちもあらしかつふりまざる」等でございます、殊にすばらしくて雪の深さも勝っておりますでしょう。

### 〈十番〉

#### 【本文】

十番

左

散位藤原行家<sup>①</sup>

都にはしくる、雲のたえまより山の端みればふれる白雪

右

日吉禰宜祝部成茂<sup>③</sup>

たつぬき友まつ雪のきえかてにいましもつもとしのくれ哉<sup>④</sup>

右歌、たつぬへき友待雪の消かてに今しもつもる年の

暮かなまことに宜く、左歌にはこよなくまさりてそ

待める、抑前藤大納言寛喜の比ほひ百首を人々

よませられしに、此右歌見し心ちし侍り、同作者よも

そ二度はとりいたし侍らし、老毛のあまりにひかおほ

えにてそ侍らん

#### 【他書所伝】

〔左歌〕ナシ 〔右歌〕ナシ

#### 【本歌】

〔右歌〕

『後撰和歌集』冬・四七一・「雪の朝、老を嘆きて」・貫之  
降りそめて友待つ雪はむばたまの我が黒髪の変るなりけり

#### 【語釈】

①散位藤原行家―当該歌合判者、入道正三位知家（蓮性）男。六条藤家の嫡流。

貞応二年（一二二三）生。建長七年（一二五五）従三位。文永四年（一二六七）従二位。同八年、左京大夫。父や真観らと共に、反御子左派の立場に立つ。真観の推挙により、『続古今和歌集』の撰者に加えられる（『井蛙抄』）。また、文永八年『人家和歌集』の撰集も行っている。当該歌合の他には寛元元年『河合社歌合』、宝治二年（一二四八）『宝治百首』、建長三年『影供歌合』、弘長元年（一二六一）『弘長百首』等に出詠。同二年の『三十六人大歌合』にも入撰。文永二年八月十五夜『歌合』、同九月十三夜『龜山殿五首歌合』等に出詠。『万代和歌集』、『秋風抄』、『秋風和歌集』、『雲葉和歌集』、『閑月和歌集』、『夫木和歌抄』等の作者。文永二二年五三歳で没す。『続後撰和歌集』以下の勅撰集に八〇首入集。

②しくる、雲のたえまより―時雨が降る雲の切れ間から。「冬来てはしくる、雲の絶え間だによもの木の葉の降らぬ日ぞなき」（『新勅撰和歌集』冬歌・三八三・「冬歌よみ侍けるに」・為家）。

③日吉禰宜祝部成茂―祝部允仲男。母は伊賀守源光基女。当該歌合の出詠歌人である下野は妹。治承四年（一一八〇）生。正四位下、大藏少輔、丹後守、日吉社禰宜、惣官となる。当該歌合の他には元久元年（一二〇四）『春日社歌合』、寛元元年（一二四三）『河合社歌合』、建長三年（一二五二）『影供歌合』、宝治二年（一二四八）『宝治百首』等に出詠。『万代和歌集』、『秋風抄』、『雲葉和歌集』、『夫木和歌抄』の作者。家集『成茂宿禰集』があるが、これは『宝治百首』における詠歌を収めたものである。『古今著聞集』（巻第十三・祝言）には、建長元年一月一八日、七十賀に後嵯峨院・為家より詠を贈られたとある。建長六年七五歳で没す。『新古今和歌集』以下の勅撰集に四四首入集。

④たつぬき友まつ雪―判詞により「たつぬへき」に改める。友の来訪を強く希求する表現。「友まつ雪」は【本歌】と同じく雪が後から降ってくる雪を待っていることと、友を待っていることを併せて表現する。

⑤きえかてに―（雪が）消えることができずに。「春の日のうららにてらすかきねには友まつ雪ぞ消がてにする」（『堀河百首』春廿首・九一・基俊）は右歌と同様に貫之の歌を本歌としている。

⑥としのくれ哉―年末。年の暮れ。ここでは本歌と同様、詠者自身の老い（当該

歌合催行時、成茂は六七歳)も重ねるか。「ながめこしはなと月とのかずかずにながみにつもるとしのくれかな」(『道家百首』冬十五首・七〇)。

⑦右歌、たつぬへき友待雪の消かてに今しもつもる年の暮かなまことに宜く、左歌にはこよなくまさりてそ待める―右歌を一首そのまま引用し、表面上では右歌を褒めているが、後述のごとく知家に賞賛の意はない。右歌を一首そのまま引用しただけでどこがすばらしいのか、どこが左歌に勝っているのかを具体的に述べていないことから、この十番の判詞は、他の判詞には見られない特殊な判詞である。

⑧前藤大納言―藤原為家を指す。為家は仁治二年(一二四二)二月、権大納言に任じられるも同八月、父定家の喪に服するため権大納言を辞す。

⑨寛喜の比ほひ百首―為家が諸人に勧進した、寛喜元年(一二二九)『為家卿家百首』のことか。当該歌合判者の知家、右歌の作者である成茂も参加している。判詞の「此右歌見し心ちし侍り」という成茂の歌は散佚しているが、家隆のほか如願の百首がほぼ完存し、為家・俊成卿女・信実・隆祐などの作品を拾遺できる。また、【語釈】②に挙げた為家の詠はこの百首での詠かとされている。なお、この百首をもとに寛喜四年『日吉社撰歌合』が催されており、知家の名も見える。

⑩老毛のあまりにひかおほえにてそ待らん―「老毛」は「老耄」と同義で、おいほれるの意。「わたりする河瀬の霞立ちなれて藤なみかざす雲の上人」(寛喜四年『石清水若宮歌合』河上霞・一番左・一)の自詠に対して定家が「左歌、老耄之狂言也」と評しているように自身を謙遜している場合に用いられる。また、「こころざしあるかなきかのわすれみづいかなるをりにおもひいづらん」(『六百番歌合』恋部上・稀恋・十一番右・七四二・経家)に対する俊成判「されど老耄のあひだ、さしてえおほえ侍らず」のように老耄の身であるために明確に記憶していないといった例も散見する。「ひかおほえ(僻寛)」は「ふまばをしふまではゆかむかたもなし」いかはすべき野路のはつ雪(永万二年『中宮亮重家朝臣家歌合』雪・十番右・一〇四・顕昭)に対する俊成の判詞に「右の歌、上句はちかくかやうのこと、きさし心地する、ひがおほえにや」とみえるように記憶違いの意で、一度見聞した事柄に対して確証が持てないことを表したものの。当該判詞では謙遜の意を示しながら暗に成茂に対する批判も込めているか。

### 【補足】

十番の判詞からは、この番の勝敗が判断できない。知家の判詞によれば、成茂は寛喜年間に提出した百首歌のうちの一首を当該歌合に提出したらしい。知家も同じ百首歌に歌を提出していたらしく、成茂の再提出に気づき、そのことを判詞で指摘している。一見すると、十番の判詞は右歌を絶賛しているようにも見えるが、具体的な評価の指摘はなされておらず、知家の成茂に対する批判が込められていると思われる。

### 【通釈】

十番

左

散位藤原行家  
都では時雨が降る雲の切れ間から山の稜線を見ると、白雪が降っている。

右

日吉禰宜祝部成茂

訪ねてくるはずの友を待っている私と同じように、後から降ってくるのを待つ雪が消えずにいて、まさに今積もる年末、(そして)老年の暮れであるなあ。

【判詞】右歌の、「たつぬへき友待雪の消かてに今しもつもる年の暮かな」(と)という一首が)本当によろしく、左歌よりははなはだしく優れているようです。さて前藤大納言(為家)が寛喜の頃に百首を人々に詠ませなされたときに、この右歌を見たような気がします。右歌の作者はまさか二度も(同じ歌を)取り出されないでしょう。おいほれるあまりに覚え違いでございませうね。

### 〈十一番〉

【本文】

十一番

左持

散位藤原重氏<sup>①</sup>  
をのつからとはれましかはいか、せんつもりてふかき庭のしら雪

右

兵部権少輔菅原在氏<sup>③</sup>  
あま小舟はつ瀬のかたを見わたせば<sup>⑤</sup>ひ原やいつく山のしら雪

左歌、つもりてふかき庭の白雪、よろしくきこへ侍に、  
右の海士小舟はつせも、万葉の古風すてかたく侍れ  
は、しるて不及申勝負

【他書所伝】

〈左歌〉ナシ 〈右歌〉ナシ

【参考歌】

〈左歌〉

『万葉集』卷十・冬相聞・二三三七

海人小舟泊瀬の山に降る雪の日長く恋ひし君が音そする

【語釈】

①散位藤原重氏―父は当該歌合三番出詠の顕氏。嘉禎元年（一二三五）生。当該歌合催行時は一二歳。六条藤家の末流で、当該歌合判者の知家は叔父にあたる。正元元年（一二五九）八月七日従三位に叙せられ、文永二年（一二六五）正月三〇日宮内卿に任ぜらる。文永六年正月五日正三位。建治三年（一二七二）一月一日に出家、同九日に没す。当該歌合の他に弘長三年（一二六三）「内裏百首」、  
「宗尊親王家百首」等に出詠。『万代和歌集』、『夫木和歌抄』等の作者。『続拾遺和歌集』以下の勅撰集に六首入集。

②つもりてふかき庭のしら雪―万が一の人の訪れに際して、庭に深く積もった雪がその妨げとなることを憂う仕立て。「吹きおろす軒ばの山の松風に庭しもふかくつもるしら雪」（『洞院撰政家百首』冬部・雪・九三四）は判者知家の詠。

③兵部権少輔菅原在氏―為俊男。生没年未詳。従四位上に至る（『尊卑分脈』）。当該歌合出詠歌人の信実の孫にあたる藤原為継女を妻にもち、信実は義祖父である。『現存和歌六帖』の作者。勅撰集への入集はみられない。

④あま小舟はつ瀬―「あま小舟」は地名「初瀬」のはつ（泊つ）にかかる枕詞。「はつ瀬」は大和国の歌枕。現在の奈良県桜井市初瀬町のあたりをさす。三方を泊瀬山、三輪山、天神山・鳥見山に囲まれており、伊賀や伊勢国に通じる交通の要所であった。「あまをぶねはつせのひばらしろたへにつもらぬゆきはつきぞみえける」（『為家千首』秋・四一六）。

⑤ひ原―檜の林。「三諸つく三輪山見ればこもりくの泊瀬の檜原思ほゆるかも」（『万葉集』卷七・雑・一〇九五）のように、万葉以来「初瀬」「三輪」「巻向」の歌枕の風景として雪や月、紅葉などとともに詠まれた。

⑥万葉の古風―『万葉集』に詠まれるような古風な詠みぶり。後の例であるが、「むらさきのなたかの浦の藤の花春の色にや浪も立つらん」（建長八年『百首歌合』春・三四五番左・六八九・伊平）に対する知家の判詞「むらさきの名たかの浦、万葉の古風こととしき体には侍るに」が「紫の名高の浦の砂地袖のみ触れて寝ずかなりなむ」（『万葉集』卷七・二三九二・「浦の沙に寄する」）や、「紫の名高の浦のなりのその磯になびかむ時待つ我を」（『万葉集』卷七・豊諭歌・一三九六・「藻に寄する」）等を念頭においた表現であるように当該歌も【参考歌】をふまえた歌であることによるか。

⑦すてかたく侍れは―（左右の歌がそれぞれ）捨てがたくご置いますので。判詞に用いられる場合は、「むらさきの色こき野べのつぼすみれ心をそめぬ人やなからむ」、「浦風は猶夜やさむき難波人あし火たく屋に衣うつなり」（建長八年『百首歌合』春秋・三三二番・六六三・六六四・経家、実伊）に対する知家の判詞「左の色こき野辺のつぼすみれ、右のあし火たく屋にうつ衣、いづれも捨てがたく侍れば勝負弁がたくぞ」のように左右どちらの表現も良く、勝敗を判断しかねることから、持を付されることが多い。

【通釈】

十一番

左 持

右

散位藤原重氏

万が一、（人の）訪れがあったならばどうしようか、積もって深い庭の白雪を。

初瀬の方角を見渡すと、檜原はどこなのだろうか。（初瀬の方に降る）山の白雪で（隠れている）。

【判詞】左歌は、「つもりてふかき庭の白雪」（という語）が、まあよろしく聞こえますところ、右（歌）の「海士小舟はつせ」も、『万葉集』に詠まれるような古風（な詠みぶり）がすてがたくご置いますので、無理に勝負を申し上げるには及ばない。

## 〈十二番〉

【本文】

十二番

左勝

① 尚侍家中納言

ふみつくる跡見まほしき人はこてさもいたつらにつもるゆきかな

右

④ 中納言弟

あはれとも思は、人のとひてまし雪ふりつもるやとはいかにと

左右、心詞ことよろしくて、こなたかなたにおもひ

さためす侍を、猶さもいたつらにつもる雪哉、いとえん

に侍うへに、右歌をかしうは侍れとも、との字五侍り、さ

きの番にこまかに申侍り、かた／＼左可為勝也

【他書所伝】

〈左歌〉ナシ 〈右歌〉ナシ

【本歌】

〈左歌〉

『和泉式部集』五二八・「冬のはてつかた、雪のいみじうふるひ、人やる」

ふりはへてたれはたきなんふみつくる跡見まほしき雪の上かな

【語釈】

① 尚侍家中納言―親子、典侍親子朝臣とも。真観女。同じく当該歌合出詠歌人の鷹司院帥とは姉妹。また後述の中納言弟とも姉妹か。生没年未詳。当該歌合の他に文永二年（一二六五）八月十五夜『歌合』、同年九月十三夜『龜山殿五首歌合』、弘安元年（一二七八）『百首歌合』等に出詠。私撰集では『万代和歌集』、『現存和歌六帖』、『秋風抄』、『雲葉和歌集』、『人家和歌集』、『夫木和歌抄』の作者。『夫木和歌抄』（雑部七・一一七八九）詞書に拠れば家集が存していたか。『続後撰和歌集』以下の勅撰集に三四首入集。

② ふみつくる跡見まほしき人はこて―本歌をふまえた表現。「ふみつくる」は「文付くる」と「雪を」踏みつくる」をかける。また、「跡」は「ふみ（文）」の縁語。

本歌はこれから手紙を持ってやって来る使いの人を待つ仕立てとなっているが、当該歌はそれからしばらく時間が経っても使いが来なかった情景を詠む。

③ 中納言弟―真観女。尚侍家中納言、鷹司院帥とは姉妹か。（福田秀一氏『中世和歌史の研究』参照）。生没年未詳。当該歌合の他には出詠しておらず、勅撰集にも入集しない。

④ 雪ふりつもるやと―雪に覆われた宿の趣深さを詠んだ歌としては「雪とづる宿のあはれやいかならんけさのよ所めを人にとはばや」（正治二年『石清水若宮歌合』雪・二十七番右・二五二・見仏）がある。

⑤ こなたかなたにおもひさためす侍を―知家が判詞に用いた例としては「むかしより心に染めし花の香は昔の袖までかはらざりけり」、「秋の夜に月をはなれて行く雲のをしからぬ身とおもふかなしさ」（建長八年『百首歌合』春秋・二四四番・四八七、四八八・伊平、真観）に対する「左、心に染めし花の香は、艶ならむ事をこひねがひ、右、月をはなれてゆく雲はたけあらんことをこのめり、こなたかなたにおもひならず、よき持とぞおぼえ侍る」等がみえる。

⑥ えん―艶。上品で優雅な美しさをいう。知家が判詞に用いた例としては「山たかみあを葉の桜花さけばみどりの空にまがふしら雲」（建長八年『百首歌合』春・二百二番左・四〇三・忠基）に対する「左、あを葉のさくら、いたくえんにもきこえ侍らぬ」や「人やりの春の風かはさくら花ちりうしといひてなとまらぬ」（建長八年『百首歌合』春・二百九十七番左・五九三・中納言）に対する「左、人やりの道ならなくにこのたびはいきうしといひていざとまりなん、といふ歌の心を、ちりうしといひてなとまらぬとよまれたる、いとえんにこそ侍れ」等が挙げられる。

⑦ との字五侍り、さきの番にこまかに申侍り―当該歌合九番判詞における鶴膝病に関する記述を指す。九番【語釈】⑧⑨参照。

【通釈】

十二番

左勝

尚侍家中納言

（雪を）踏みわけて手紙を持ってくる（その）足跡を見たかった人は来ないので、

こうもむなしく積もる雪であるよ。

右

中納言弟

情趣があると思つたならば人が訪ねてくるだろうに。雪が降り積もっている家ほどのようであろうと。

〔判詞〕左右（とも）、（和歌の）内容も表現も特によろしくて、あちらこちらと考えを定めないでおりますのが、やはり（左歌に）「さもいたつらにつもる雪哉」（とあるのが）、とても上品で優雅でありますのに加えて、右歌も面白くはございますけれども、「と」の字が五つございます。（その点に関しては）先ほどの番で細かく申し上げました。いずれにしても左を勝ちとするべきである。

### 〈十三番〉

【本文】

十三番

左

① 入道正三位知家

まつち山待ほとひさに人もこす雪ふか、らしきへのかよひ路

右勝

④ 下野

消あへぬ友待かほに風さえてこほりはてたる庭のゆきかな

⑤ 左歌、させる事なく侍り、ひさにもき、よからすや、右歌、

⑥ 友まつ雪はふるき歌にもあまた侍へし、但、上句をうち

⑦ さ、たるには何の友待ともきこえぬやうにや侍らん、

⑧ 然共、氷はてたる庭の雪哉と侍る、いひなれてをかしく

⑨ こそ聞え侍れ、返々右勝にて侍へし

【他書所伝】

〈左歌〉ナシ 〈右歌〉ナシ

【本歌】

〈左歌〉

『万葉集』巻第九・雑歌・一六八〇・「後れたる人の歌二首」

あさもよし紀伊へ行く君が真土山越ゆらむ今日そ雨な降りそね

【参考歌】

〈右歌〉

『後撰和歌集』冬・四七一・「雪のあした、おいをなげきて」・貫之

ふりそめて友まつゆきはむばたまのわがくろかみのかはるなりけり

【語釈】

① 入道正三位知家——正三位藤原顕家男、母は伊予守源師兼女。六条藤家の末流にあたる。法名蓮性。当該歌合十番に出詠する行家の父。寿永元年（一一八二）生。建久四年（一一九三）叙爵、美作守・丹波守・中宮亮等を歴任し、建保七年（一二二九）従三位に叙され、寛喜元年（一二二九）には正三位に至ったが、嘉禎四年（一二三三）病により出家。正嘉二年（一二五八）没、七七歳。正治二年（一二〇〇）『石清水若宮歌合』、建保三年『建保名所百首』、『道助法親王家五十首』、貞永元年（一二三三）『洞院撰政家百首』、寛喜四年『石清水若宮歌合』、『光明峰寺撰政家歌合』、寛元元年（一二四三）『河合社歌合』、『新撰和歌六帖』、宝治元年（一二四七）『院御歌合』、宝治二年『宝治百首』、建長三年（一二五二）九月『影供歌合』等多くの和歌行事に参加・出詠しており、寛喜四年『日吉社撰歌合』へ六首入撰している。『万代和歌集』、『秋風和歌集』、『雲葉和歌集』等の作者。また、私撰集『明玉集』（散佚）を撰んでいる。はじめは定家のもとで和歌を学び為家とも親しかったが、当該歌合では判者を勤め、その催行を以って真観らとともに反御子左派を結成し為家と対立した。なお、建長八年『百首歌合』においても判の一部を担当している。『夫木和歌抄』（春部四・一一三九等）詞書によれば家集が存していたらしいが現在伝わらない。宝治元年『院御歌合』では判者為家の判詞を不服とし、『蓮性陳状』を後嵯峨院へ奉っている。『新古今和歌集』以下の勅撰集に一二〇首入集。

② まつち山——大和国の歌枕で、大和国と紀伊国の境に位置する。「……：輕の路より玉だすき畝傍を見つつあさもよし紀路に入り立ち真土山越ゆらむ君はもみち葉の……」（『万葉集』巻第四・相聞・五四三・「神龜元年甲子の冬十月、紀伊国に幸す時、從駕の人に贈らむがために、娘子に詠へられて作る一首 并せて短歌」・金村）のように大和から紀伊を越える場合等に詠み込まれ、境界にあたる「まつち山」

はとりわけ情趣のある場であった。また、「こぬ人をまつちの山の郭公おなじ心にねこそなかるれ」(『拾遺和歌集』恋三・八二〇・「題しらず」・よみ人しらず)のように「待つ」との掛詞として詠み込まれることが多い。

③きへのかよひ路―「まつち山」とともに【本歌】を踏まえた表現。【本歌】は紀伊へ行く人へ思いを馳せているのに対して、知家詠では【本歌】の情景を展開させ、紀伊からこちらに帰ってくる人待つ設定となっている。加えて、「雪」題に沿って、待っている人の訪れがないことから雪が深く積もっているらしい紀伊への通路へ思いを致す仕立てとなっている。

④下野―日吉禰宜祝部允仲女。母は伊賀守源光基女。当該歌合十番に出詠する祝部成茂の妹。源家長室。生没年は未詳だが、文永三年(一二六六)成立の『続古今和歌集目録』では故者に入り、少なくともこの時以前に没している。はじめ信濃と称した。元久元年(一二〇四)頃、後鳥羽院に出仕。元久元年『春日社歌合』、寛喜四年(一一三三)『石清水若宮歌合』、『光明峰寺撰家歌合』、貞永元年(一一三三)『名所月歌合』、嘉禎二年(一一三六)『遠島御歌合』、宝治元年(一二四七)『院御歌合』、同二年『宝治百首』、建長三年(一二五一)九月『影供歌合』等に出詠し、寛喜四年『日吉社撰歌合』へ三首入撰している。後鳥羽院が隠岐へ配流された後も後鳥羽院旧臣グループの一人として、安貞元年(一二二七)七月に催された家長主催の日吉社歌合等に出詠し、後鳥羽院歌壇の再生を目指す一連の和歌活動を展開した。『万代和歌集』、『秋風和歌集』、『雲葉和歌集』等の作者。『夫木和歌抄』(雑部二・八八四〇等)詞書によれば家集が存していたらしいが現在伝わらない。『新古今和歌集』以下の勅撰集に二九首入集。

⑤消あへぬ―消えきれない、の意。「心ざしふかくそめてし折りければさえあへぬ雪の花と見ゆらむ」(『古今和歌集』春歌上・七・「題しらず」・よみ人しらず)等が例。⑥友待かほ―いかにも友を待っているような顔つき。「友待つ雪」は「はるのけはさむからねども山がくれともまつ雪はさえのこりけり」(『中務集』一三・「残雪」)等のように次の雪が降ってくるまで消え残っている雪を指すが、当該歌では【参考歌】のように視点人物自身が友を待っていることも詠み込まれているか。なお、下野は当該歌合「祝」題の卅九番右でも「春日山しられぬ谷の埋木ももえ出る春

にいまやあひみん」と述懐性が看取される歌を詠じている。

⑦こほりはてたる―「陰たえて氷りはてたる池水にたくひもみえぬをしのひとりね」(『道助法親王家五十首』冬・池水鳥・七四六)や「池の面は氷りやはてんどちそふる夜ごろのかずを又しかさねは」(『拾遺愚草』冬・二四三四・「池水半氷」)のようにすっかり凍りきってしまった、の意。

⑧させる事なく―特にこれというほどの事もなく、の意。難があるわけではないが、積極的に勝を付すような歌のさまでもない場合に用いられることが多い。「さほひめのいとそめかくるあをやぎをふきなみだりそ春の山風」(天徳四年「内裏歌合」柳四番右・九・兼盛)について実頼は「右歌、させることはなけれど、難はみえず」と判じている。また、「みかりせしかたのふゆやつらからんはるの山ちにさぎすなくなり」(『千五百番歌合』春三・二百三番右・四〇六俊成)に対して俊成は「右、ただ百首の中の地歌に侍り、尤させる事なし」と評しており、「させる事なし」は凡庸な歌に付されることが多い。

⑨き、よからず―聞き心地が悪い。歌を読んだときの音の流れやリズムがなだらかではなく不快である場合に用いられる。例えば、「やまひめのいかにそむればもみぢ葉のからくれなるの色にいづらん」(文治二年「歌合」紅葉・九番左・一一九・有経)に対する判詞「左歌、させるとがあり、などもたまひあはず、くのすゑにおなじ文字あまたはべりて、ききよからずや」等がみえる。

⑩友まつ雪はふるき歌にもあまた侍へし―「友まつ雪」(と詠んだ歌)は古い歌にも多くございます。の意。「ふるき歌」については後の例に「岩のうへにあらしの風はいとさむしたびねの衣かす人もがな」(宝治元年「院御歌合」旅宿嵐・百十二番右・二二四・弁内侍)に対する為家の判詞「右ふるきうたのこと葉おなじ句にならひて」がみえ、これは弁内侍詠の一句目と三句目が本歌である「いはのうへに旅ねをすればいとさむし昔の衣を我にかさなん」(『後撰和歌集』雑三・一一九五・「いその神といふてらにまうでて、日のくれにければ、夜あけてまかりかへらむととどまりて、この寺に遍昭侍りと人のつけ侍りければ、ものいひ心見むとていひ侍りける」・小町)と全く同じであることを難したもので、「ふるき歌」はおおよそ三代集成立あたりの時期に詠まれた歌を指す。「友まつ雪」と詠ま



れた歌は「梅花咲くともしらずみよしのの山に」ともまつ雪のみゆらん」（『貫之集』六〇）、「延喜十六年齋院御屏風のれうの歌、内裏より仰うけ給はりて六百人家に女どもの庭に出でて梅花をみ、また山にのこれる雪をみたる」等古くからみえる。

⑪上句をうちきゝたるには何の友待ともきこえぬやうにや侍らん―「こをおもふすだちのををあさゆけばあがりもゆかずひばりなくなり」（『六百番歌合』春部・雲雀・十八番右・九六・寂蓮）に対する俊成判「初五字のはなれて、上句にてはなにごともきこえざるにや」のように、上句にある「友待つ」が本来かかるべき「雪」と離れていて、上句を讀んだだけでは何が友を待っているか分からないことを指摘したもの。

⑫いひなれて―習熟した表現で、の意。当該歌のように「雪」が「こほりはて」と表現された例はあまりみられない。「いかにしてあきはひかりのまさるらんおなじみかさの山のはの月」（『永縁奈良房歌合』月・三番左・三三・永縁）に対する判詞「左歌、あしうもきこえず、すゑなどいひなれてうたとおほゆ、いかなるかけを、などいへるふることおもひいでられて、いとをかし」等が例としてみえ、これは永縁詠における下の句の表現が洗練されており且つ「いつもみる月ぞとおもへどあきのよはいかなるかけをそふるなるらん」（『後拾遺和歌集』秋上・二五六・「寛和元年八月十日内裏歌合によみ侍ける」・長能）を想起させることについて称美している。

⑬をかしく―表現された構想や内容の面白さを称賛するという用語。ここでは「氷はてたる庭の雪哉」という表現が洗練されていることを称賛して「をかし」と評する。「月のさすまきの板戸としりながら誰あけよとてたたく水鶏ぞ」（『若狭守通宗朝臣女子達歌合』蛙鳥・四番右・八・中務命婦）に対する通俊の判詞「右のうた、月のさすまきのいた戸といふ事、めづらしからねど、いひなれてをかしくなむ」等がみえる。

#### 【通釈】

十三番

左

入道正三位知家

「まつち山」という名のように待つ間が長く（結局私の待つあの）人も来ない。

雪が深いらしい紀伊への通り路であることだなあ。

右勝

下野

消えきれず後から降ってくる友の雪をいかにも待っているような顔つきに風がさえて（結局は待っている友の雪が来ることなく）すっかり凍りきってしまった庭の雪であることよ。

〔判詞〕左歌（は）、特にこれというほどの事もなくございます、「ひさに」も聞き心地が悪いだろうか。右歌（は）、「友まつ雪」（と詠んだ歌）は古い歌にも多くございますでしょう。もともと、上の句を少し聞いたのでは何が友を待つとも聞かないようでございますでしょうか。しかしながら、「氷はてたる庭の雪哉」とございます（のは）、習熟した表現で面白くこそ聞こえます、ひとえに右（歌）が勝ちでございますでしょう。

〔付記〕

本稿は、平成二十四年度尾道市立大学学長裁量教育研究費、研究テーマ「和歌資料の収集、調査を通じた鎌倉時代中後期歌壇の研究」（代表者 藤川功和）による研究成果の一部である。

